留学生教育と国際交流

ー岩手大学留学生センターの歩みー

岩手大学国際交流センター

2004

目　　次

－巻頭言－

「岩手大学留学生センターから国際交流センターへ」国際交流センター長　猪内正雄 ---------- 1

－留学生センター概要－

「岩手大学留学生センターの３年間を振り返って」前留学生センター長　岡田　仁 ---------- 3

「岩手大学留学生センター年表」 ---------- 9

「岩手大学における留学生受け入れ状況」 ---------- 12

「留学生センター教職員一覧」 ---------- 15

－報告－

「日本語特別コースと留学生教育」　松岡洋子 ---------- 19

「日本語研修コースにおける日本語教育」　中村ちどり ---------- 30

「岩手大学における理工系留学生指導について」　小笠原洋光 ---------- 41

「留学生と地域交流」　岡崎正道 ---------- 46

「国際理解教育による地域貢献の試み」　尾中夏美 ---------- 49

－資料－

Ⅰ．留学生センターにおける教育プログラム概要

日本語特別コース ---------- 55

日本語研修コース ---------- 57

全学共通教育科目（日本語） ---------- 63

全学共通教育科目（日本事情） ---------- 64

日本語・日本文化研修コース ---------- 68

日韓共同理工系学部留学プログラム予備教育 ---------- 69

農学部インターンシッププログラム（パデュー大学）日本語集中講座 ---------- 71

English Café－英語による交流授業 ---------- 73

Ⅱ．国際交流・留学生支援関連

海外の大学との交流・学生派遣 ---------- 75

チューター・会話パートナー制度 ---------- 77

国際交流会館活動記録 ---------- 78

外国人留学生実地見学旅行概要 ---------- 80

留学生が参加した地域交流一覧 ---------- 82

—巻頭言—

岩手大学留学生センターから国際交流センターへ

国際交流センター長　猪内正雄（理事・副学長）

岩手大学の国際化

岩手大学は「教育」、「研究」および「社会貢献」のおもな活動基盤を地域に置いてきましたが、地域と世界の一体化が進むグローバル化時代において、世界から地域を考えまた地域から世界に発信する視点が不可欠になっています。

一方、グローバル化時代におけるボーダレス化は、大学間の国際競争を激化させる結果になり、「教育の国際基準化」、「研究の国際レベル化」および「教育研究の国際貢献化」を迫ることになりますが、今後岩手大学としてはこの「国際化」を視野に入れて国際交流を進めていくことが重要になると思います。

センターの改組と本報告書のねらい

これまで岩手大学では、外国人留学生の受け入れと日本語教育を中心とする留学生の支援業務は留学生センターにおいて、また海外の大学との共同研究や大学間の交流協定に関する業務は研究協力課において行ってきました。法人化を契機に、大学の教育研究支援施設の機能化と効率化を一層推し進めるために従来施設の見直し再編を行いましたが、このなかで国際交流活動に関する支援業務を一元化して「国際交流センター」を設置することにしました。

「留学生センター」を「国際交流センター」へと組織再編したこの機会に、創設から今年3月までの3年間にわたる留学生センターの活動を記録としてまとめて、それらの結果を新しいセンターに引き継いでいくために、本報告書を発行することにしました。

留学生センターの経緯

留学生センターは平成13年4月に学内措置として設置され、設置当初は学部の兼務教官によって運営されておりましたが、14年2月には2名の専任教官が配置されました。平成14年4月からは、学生部留学生課とともに正式に省令施設として発足し、同年6月にはさらに3名の専任教員が配置になり現在にいたっております。

国際交流の現状と今後

現在岩手大学では、アジアを中心とする30国からの約200名の留学生を受け入れ、また海外の大学へ長期・短期併せて約50名の留学生を送り出しています。また、学術・教育交

流を目的として10国34大学との大学間あるいは学部間協定を締結しています。

今後は全世界の国々との教育研究交流を行うことを積極的に進めていくことにしておりますが、なかでもこれまでの実績がありしかも地理的・気候的にも近い東アジアの国々については、これまでと同様に交流を深めたいと考えております。

おわりに

本報告書を纏めるにあたり、前センター長の岡田仁教授には、設置当時の経緯からセンターを改組するまでの3年間にわたる活動状況の執筆をお願いしたほか、本報告書作成について全般的な指導を頂きました。記して、感謝申し上げます。

岩手大学留学生センターの３年間を振り返って

前留学生センター長　岡田　仁（岩手大学人文社会科学部）

1　はじめに

岩手大学留学生センターは平成１３年４月に学内措置による施設として誕生し、翌年の平成１４年に省令施設となり、平成１６年には全学施設の組織改革の一環として国際交流センターへと発展的に解消した。岩手大学留学生センターという看板があがっていたのは３年間であった。この間センター長を勤めさせていただいたが、実は留学生センターはもちろん国際交流について不案内の点が多く、学内措置時代の協力教員をはじめ、専任教員や留学生課の職員にはずいぶん迷惑をかけたことと思う。（本人が「なぜ俺が留学生センター長なんだ」と自問したくらいだから、他の人は「なぜあいつが」といぶかったことと思う。）しかし、３年間この仕事をしてきた者として多少の感慨もあるのでそれを述べさせていただくが、正確な記録や活動報告は他に譲り、ここに記すのは私の印象と主観に基づいた留学生センターの３年間である。

2　留学生センター設置以前の留学生教育

これは以前留学生センターのホームページに書いたことであるが、新米の留学生センター長にとって印象深い出来事だったので、ここでもう一度述べさせていただく。それは岩手大学が初めて参加した留学フェアのクアラルンプール会場でのことであるが、岩手大学のブースに年輩のマレーシア人男性が訪れ、３０年も前に岩手大学に留学していたが、在学中とてもお世話になったと言って、ある事務官の名前を挙げられた。当時岩手大学の留学生は恐らく数名で、留学生担当の専任教員もいなかったはずだが、南の国から寒い岩手に来て勉強している留学生を心から温かく支援した人々がいたことが分かり、留学生教育の組織を整備するに当たっても、肝心なのは一人一人の努力であることを痛感した。

留学生数の増加により平成３年には専任の日本語担当教員が１名配置され、その後工学部に留学生担当教員が１名配置されるなど本学における留学生教育も次第に整備されていったが、体制として未だ不十分であることは否めず、日本語教育と修学指導や生活支援は、専門教育の指導教官はもちろん、非常勤講師、事務職員、地域のボランティアなどに多くを負っていた。例えば留学生相談については、１０年間にわたって担当していただいた小野寺和子先生が詳細な報告書を作成して下さるなど、大学の組織を遙かに超えて、文字通り手作りの支援があったことを銘記しておきたい。

3　学内措置として誕生した留学生センター

3.1　設置の準備

関係者の地道な努力により、本学が受け入れる外国人留学生の数は年々増加し、受け入れ組織を整備する必要性が次第に認識されるようになった。平成１１年には国際交流委員会学生交流専門委員会に「留学生施策懇談会」が設けられ、留学生センター設置を目指して具体的な検討に入った。

平成１２年には２４ヶ国から１８８名の留学生を迎えるまでになり、留学生センター構想が現実味を増してきたが、省令施設としての速やかな設置が困難であったため、平成１３年にまず学内施設として発足することとなった。省令施設でないため定員がつかず、併任による「協力教員」によってセンターは運営されることとなり、各学部から参加した２０名の「留学生センター協力教員」には、本来の教育・研究、公務で多忙の中、日本語教育部門、留学生相談部門、国際・地域交流部門の３部門でセンターの運営と留学生教育・支援に大きな役割を果たしていただいた。特にその中心を担ってきた先生方の献身的な努力はこの種の全学的組織の設置と運営について多くの示唆を与えてくれた。ここにあらためて感謝申し上げたい。

3.2　活動の開始

こうして、岩手大学留学生センターは学内施設として発足したのだが、定員ゼロとはいえ、看板を掲げたからには学生や外部の人から見れば正式なセンターに違いなく、私たち関係者もそのつもりであった。したがって、標準的な留学生センターの業務を果たすことを目指して、他大学の留学生センターを訪問して教えを受けるなど手探りで業務を進めていった。その際、長年にわたって外国人留学生の指導教官を務めてこられた先生方や国際交流活動に積極的に携わってきた先生方が協力教員となっていたことは生まれたばかりのセンターにとって幸運であった。

3.3　英語による授業科目開設の準備

留学生センター設置を契機に新たに取り組んだプロジェクトがいくつかある。その一つに「英語による授業を中心とした短期留学特別プログラム」の検討がある。その主な目的は英語圏への本学学生の短期留学を促進することにあった。本学が受け入れる外国人留学生の数は着実に増加していたが、派遣については十分とは言い難い状況であった。留学希望者の多くを占める英語圏への短期留学を可能にするためには、交換留学を目的とする学生交流協定を充実する必要がある。そして、英語圏から交換学生を受け入れるためには英語による授業科目の開設が不可欠である。こうした認識の下に、留学生センター運営委員会に「短期留学促進のための英語による授業実施検討ワーキンググループ」（委員長三浦勲夫・人文社会科学部教授）が置かれ、カリキュラム、授業担当者、広報等の具体的検討に入った。足かけ２年の検討を経て、平成１４年度末には学則の整備と具体的プログラムの発表にまでこぎ着けた。

3.4　省令化へ

しかし、「学内措置」の留学生センターにとってどうしても避けられない大目標は「省令化」であった。そのためには目に見える活動実績を上げることと外国人留学生数を２００名まで引き上げることが当面の課題であり、日本語教育などの留学生支援プログラムの充実や留学フェアへの参加などに積極的に取り組んだ。また、概算要求に当たっては文科省の理解を得られるよう、当時の経理部長（吉岡武晴氏）の助言により、寒冷地大学との交流を計画するなど本学の特色を打ち出す工夫も行った。

こうした努力と文部行政の歯車がかみ合ったのであろう、予想より早く、平成１４年度に省令化が実現することとなった。ここに至るまでには、学生部長時代に留学生センターの企画を立て、副学長としてバックアップの責任を果たしてこられた中嶋芳也副学長のご尽力が大きかったことをあらためて記しておきたい。こうして関係者一同は留学生センター省令化の内示を大いに喜んだのであるが、この内示は難問も含んでいた。つまり、定員問題である。センターの教官定員は文科省がセンターに付けた、いわゆる純増分の定員では足りなかったのである。このため各学部から定員を供出していただくという非常に困難な事態が生じたのだが、海妻矩彦学長のリーダーシップと各学部のご理解により、無事に５名の定員を確保することが出来た。このように各学部が留学生センターのために自分たちの定員を割愛したという意識は、時には留学生センターに対する厳しい見方に向かうこともあったが、同時に、各学部の構成員に「自分たちが協力して作ったセンターなのだ」という、全学施設に対する連帯意識を生む契機にもなったのではないかと思う。少なくても私はそのように理解している。

4　留学生センターの２年間

4.1　留学生センターの誕生

平成１４年４月の正式発足に向けて取り組むべき最大の課題は人事であった。留学生センター運営委員会が教員選考委員会を構成し、学長を委員長とする留学生センター管理委員会にセンター長候補者と専任教員候補者を推薦することとなり、センター長については学内措置時のセンター長が、また、専任教員については学内移動の２名が決定し、残り３名の専任教員については公募することとなった。公募のための選考要件の検討を経て、公募文書を関係機関に送付したほか、インターネットによる公開も行った。幸い５０名を超える多数の応募者があり、優秀な方が非常に多く、日本語教育や国際教育交流の分野の活況が感じられたが、それだけに選考には大変苦労した。選考委員の間で忌憚のない意見の交換があったが、岩手大学の留学生センターにとって最善の人選をしようということでは意見が一致しており、建設的に議論が進められた結果、全員一致で３名の最終候補者を決定することができた。管理委員会の了承もすぐに得られたので、この新しい戦力にはすぐにでも仕事に取りかかって欲しかったのだが、諸手続の関係で６月１日付けの着任となった。５月末には、留学生センターに深く関わってこられた海妻

学長と中嶋副学長の任期中に設置式典・祝賀会を催すことができた。そして６月からは専任教員５名と留学生課の新体制で本格的活動が始動した。

4.2　日本語カリキュラムの充実

日本語教育、留学生指導、国際交流など各分野でセンターが担うべき課題が山積していた。日本語教育については、主として大学院入学前予備教育の「日本語研修コース」の新設と在籍留学生のための「日本語補講」の充実が重要課題であった。約６００時間の集中授業で構成される「日本語研修コース」は本学では初めてであり、コースの担当者には他大学での経験を生かしてカリキュラム編成と授業方法を決定していただいたが、当初は周囲の「無理解」でご苦労をおかけしたことと思う。しかし、無事に１期生を出し、その後も十分な教育成果を挙げていることは衆目の一致するところだと思う。

日本語補講については、従来は文字通り「補講」でしかなかったが、センター設置を機会に、本学在籍外国人留学生の日本語能力アップの中心的授業として位置づけ、その充実を図ることにした。つまり、本学に在籍して日本語教育を必要とする外国人は院生、学部生、交換学生、科目等履修生、研究生、研究者等様々であり、また、その日本語レベルと目指す達成目標も様々である。そのすべての要望に応えることは不可能だが、留学生センターの主要任務である日本語教育機関としてもっとやるべきことがあるはずだという認識の下に、「補講」を「日本語特別コース」へと名称をあらため、授業数の増加とともに体系的なカリキュラムの改善を図った。この「日本語特別コース」の設置はその後研修コースの複数レベル開講への対応や国際交流科目の開設の際にも大変有効であった。

4.3　全学の理解と協力

しかし、このような日本語教育の充実には大きな問題もあった。それは担当教員の負担増である。５名の専任教員配置は一般的には本学の留学生教育に十分であると考えられていたが、実際には「研修コース」一つとっても、専任教員だけでは十分な体制が組めないことは他大学のセンターを見ても明らかであった。さらに、「研修コース」は当初予定していた後期のみの開設ではなく前・後期開設する必要が生じ、大幅な開講数の増加が避けられなくなった。その他にも全学共通科目としての「日本語」及び「日本事情」、それに「日本語特別コース」がある。したがって、非常勤講師の採用が必須であった。しかし、本学の日本語教育ではそれまで非常勤講師採用の実績がなく、その上、むしろ全学的には非常勤講師削減の方針が明らかになりつつある中で、センターの専任教員が配置されたとたんに非常勤講師の要求を行うことはなかなか理解が得にくかった。しかし、他大学の例を見るまでもなく、正規の留学生センターに課せられている役割は重く、その責務を果たすためにはどうしても専任教員だけで授業をまかなうことは困難であった。幸いなことに最終的には学務担当の進藤浩一副学長の理解を得ることが

でき、平成１５年度以後のカリキュラム編成とその実施が可能になった。このこと一つを取っても、長い実績を有する学部と違って、歴史の浅い全学施設がその役割を十全に果たすためには、積極的なアピールと全学的な理解を得る努力が必要なことは明らかである。これは、ある意味では、時代の要請でもあるだろう。

4.4　国際交流事業

留学生センターの設置は日本語教育、各種行事、支援活動などの充実を可能にし、外国人留学生の期待に応えようとする所期の目的を達成しつつあると言える。しかし、留学生センターにはもう一つ大きな目的がある。それは本学在籍学生の海外留学を促進することである。既に述べたように、学内措置時代に、英語圏の大学との交換留学を可能にする受け入れ準備として、英語による授業の実施について検討を始めていたが、センター教員に国際教育交流の経験者を迎えたことにより、学生交流を視野に入れた海外大学との交流に本格的に取り組むことになった。平成１４年度にはアメリカとカナダの４大学を訪問して交流協定締結のための予備交渉を行い、その後、２大学とは大学間協定を締結した。これにより、米国アーラム大学とは本学のキャンパスでの学生交流や交換授業、職員の派遣などを行い、カナダのセント・メアリーズ大学からは国際交流専門家を招聘するなど多彩な国際交流事業が可能になった。また、学部教員と連携して、アメリカ及び韓国の大学との学生交流協定締結にも携わってきた。これらの交流を通じて海外の大学人との人脈が築かれつつあり、教育交流だけでなく大学のマネージメントなど多岐にわたる分野で交流が始まっている。あらゆる分野で国際化が進行している現在、教職員の研修はもちろん、学生に海外留学の機会を提供することは高等教育機関の当然のサービスとして今後ますます要望が高まると思われる。岩手大学の現状はまだ満足できるものではないが、留学生センターの設置はその改善に向かう大きな契機になったと確信している。

5　国際交流センターへ

5.1　法人岩手大学制度設計等検討委員会案への対応

平成１５年度の早い時期に、法人化の準備として学内施設の大幅な改革が提示された。図書館、総合情報処理センター、地域共同研究センター、生涯学習教育研究センターなどの省令施設すべてを巻き込む改革案であった。初めて「国際貢献推進センター」構想が提示されとき、私自身は唐突の感が否めなかった。しかし、重要な改革を含んでいる建設的な提案だったので、留学生センター運営委員会と教官会議で議論を重ね、「国際交流センター」案を提案し、全学組織改編の成案に生かしていただくことが出来た。

留学生センターと国際交流センターのもっとも大きな違いは、新センターが扱うべき国際交流活動の対象が増えたことである。留学生センターは文字通り外国人留学生のサービス機関である。この活動は今でも最重要項目であるが、今後の岩手大学の発展を視

野に入れると、日本人学生へのサービスと教職員へのサービスを含めて、岩手大学の国際交流活動を一元的に企画・調整できる機関の必要性は明らかである。

5.2　大学評価・学位授与機構による評価

上記の国際交流センターへの改編を推し進める原動力になったのは、平成１５年７月に大学評価・学位授与機構に提出することになった「国際連携活動」についての自己評価書である。評価の対象となった活動は「教職員の受入れ・派遣」「教育・学生交流」「国際会議等の開催・参加」「国際共同研究の実施・参画」「発展途上国等への国際協力」など多岐にわたっていた。私を含め５名の委員が平成１４年の秋から各部局の協力を仰いで岩手大学の過去５年間の国際活動を拾い上げていった。委員会の方針としては良い評価をねらうのではなくて、現実をできるだけ客観的に確認しようとするものであった。

この作業で最初に判明したことは、活動の根拠を示す資料を大学として把握していないことであった。個々の教員の努力は立派でも、大学の業績として社会に示す根拠が薄弱なため客観的な評価に堪えないおそれがあった。また、活動内容についても、留学生係や研究協力課が関わった活動は大学として活動実績を明確に示せたが、研究者の受入れ、国際集会、共同研究などについては、個人や講座の活動にとどまることが多く、大学としてバックアップ体制がとられていなかったため、活動の実態はあっても客観的な根拠の提示が困難であった。

このような反省があって、「大学として」国際交流活動を把握し必要な支援体制を取ることの重要性が認識された。したがって、留学生センターから国際交流センターへの発展はいわば必然であると言えるだろう。

6　おわりに

この原稿で「国際」という言葉を多用したが、ワープロのキーの打ち間違えで「酷使」となってしまうことがしばしばあり苦笑させられた。留学生教育や国際交流活動の仕事は際限がない。やらなければならない仕事はいつでも飛び込んでくるし、スッキリと終わる仕事は少ない。私自身は留学生センターの段階で音を上げてしまったが、国際交流センター関係教職員はいかに多忙でも「酷使」などという受け身の被害者意識とは無縁のようにみえる。他の仕事では絶対得られない貴重な体験に満ちているのもこの分野である。国際交流センターが国際交流活動の全てを網羅することは不可能だし、またその必要もないが、日常の教育活動の他に、戦略的に重点的支援を行う企画力と実行力が求められることになるだろう。さいわい、センター長に猪内正雄副学長が就任したことにより、大学全体の国際化と直結する形でセンターの仕事が活かされていくことと思う。あとは大学構成員が国際交流センターを自分たちの機関として利用し、また、喜んで支援する協力関係が醸成されるのを待つばかりである。

岩手大学留学生センター年表

平成１２年度

７月　・国際交流委員会学生交流専門委員会の下に設置された「留学生施策懇談会」が「留学生センター設置構想について」を発表。

１３年２月　・国際交流委員会ワーキンググループが「岩手大学における国際舞台で活躍できる能力の育成等について」を学長に答申。これらに基づき学内措置として留学生センターの設置準備を始める。

３月　・他大学留学生センター視察（群馬大、信州大、富山大、金沢大）

平成１３年度

４月　・学内措置として岩手大学留学生センター発足

・第１回留学生センター運営委員会で平成１３年度の主な検討事項を決定：①省令化施設概算要求の準備（「留学生センター設置計画書」）、②日本留学フェア参加、③日本語教育改善、④各種プログラムの開発、⑤広報の強化、⑥各部門の任務

・留学生センター看板上掲式

・留学生センター設置祝賀会

５月　・外国人留学生オリエンテーション及び交歓会

６月　・日本留学フェア参加（インドネシア及びマレーシア）

８月　・第４回留学生センター運営委員会で「短期留学推進のための英語による授業実施検討ワーキンググループ」を設置

・留学生実地見学旅行（筑波研究学園都市と日光方面）

９月　・外国人学生のための進学説明会参加（東京）

１０月　・平成１４年度に留学生センターの省令化が実現することとなり準備に入る。

１２月　・第７回運営委員会で留学生センター設置のための関連諸規則の整備の検討専任教員選考方針について検討

１４年１月　・第１回留学生センター管理委員会。次の事項を運営委員会の審議に付託：①センター長候補者の推薦、②専任教員の選考方法、③専任教員候補者の推薦、④センター関連学内規則案の作成

・広島大学留学生センター長（二宮皓氏）講演会

・第２回留学生センター管理委員会で留学生センター長の選考及びセンター専任教員として学内教員２名の選考を運営委員会に付託

２月　・第３回留学生センター管理委員会で、①留学生センター運営委員会から留学生センター長として推薦された現センター長を了承。②留学生センター

運営委員会で選考した２名の候補者を留学生センター教授、助教授として了承。③３名の専任教員について公募することとし、その要件等を明記した公募要項を了承

３月　・ブダペスト工業経済大学（BUTE）訪問

平成１４年度

４月　・省令施設として留学生センター及び留学生課が正式に発足

・第４回留学生センター管理委員会で留学生センター教員選考委員会から推薦された３名の専任教員最終候補者を了承

５月　・留学生センター設置記念式典、祝賀会

６月　・留学生センター新任教員３名が着任

・外国人留学生オリエンテーション及び交流会

８月　・岩手県留学生交流推進協議会留学生交流会（岩手山青年の家）

・外国人留学生見学旅行（北海道、小樽商科大学）

９月　・外国人学生のための進学説明会参加（東京）

・日本留学フェア参加（韓国）

１０月　・日本語研修コース開始

・日本留学フェア参加（タイ・ベトナム）

１２月　・岩手大学外国人留学生後援会規約改正

１５年１月　・ＪＡＦＳＡ理事（服部誠氏）講演会

・留学生スキー研修旅行（安比高原）

・運営委員会で①「岩手大学留学生センター非常勤講師任用に関する申し合わせ」了承。②「岩手大学国際交流科目に関する申し合わせ」（案）及び③「岩手大学短期留学特別プログラム」（案）を岩手大学教育協議会に提案することを了承。④15年度開講予定国際交流科目一覧了承

２月　・北米４大学（ニューヨーク州立大学バッファロー校、カナダ・セント・メアリーズ大学、セントラル・ミシガン大学、アーラム大学）訪問

３月　・日本語研修コース修了式

・外国人留学生卒業・修了生送別会

平成１５年度

４月　・短期留学特別プログラム実施委員会発足。ワーキンググループとして短期留学特別プログラム実施専門委員会設置

・重症急性呼吸器症候群（ＳＡＲＳ）の対応策について全学的な取り組みを行う。

・日本語研修コース開講式
・外国人留学生オリエンテーション・交歓会
・アーラム大学及びセント・メアリーズ大学との大学間交流協定（学術）を人文社会科学部とともに提案
・海外研修・留学オリエンテーション

５月　・ＮＡＦＳＡ参加

６月　・ＵＳ・ＵＭＡＰとのコンソーシアムに参加申請（国際交流委員会了承）
・岩手県留学生交流推進協議会

７月　・学内各センターの再編成について検討が始まり、留学生センター関連では「国際貢献推進センター」案を検討、「国際交流センター」案を採用。

８月　・岩手県留学生交流推進協議会県内留学生合宿研修会（岩手山青年の家）

９月　・国際交流センター構想について検討を始める。
・外国人学生のための進学説明会
・外国人留学生見学旅行（松島、会津、福島大学）
・日本語研修コース及び日本語・日本文化研修コース修了式

１０月　・日本語研修コース（日韓共同理工系プログラムを含む）及び日本語・日本文化研修コース開講式
・外国人留学生後期オリエンテーション
・学生団体（学生委員会、留学生委員会、サークルU）主催による留学生歓迎会
・日本留学フェア参加（タイ）

１６年１月　・留学生スキー研修旅行（安比高原）
・危機管理セミナー実施（講師：ＪＡＦＳＡ理事服部誠氏、日本アイラック社長国原秀則氏）

２月　・韓国・明知大学との大学間交流協定及び学生交流に関する覚書を人文社会科学部とともに提案

３月　・セント・メアリーズ大学国際事業部長デニス・レクレア氏招聘
・北東北３国立大学留学生教育に関する協議会（弘前大学）
・日本語研修コース修了式
・外国人留学生送別会
・留学生センターは平成１６年度発足の国際交流センターへと発展的解消

岩手大学における留学生受け入れ状況

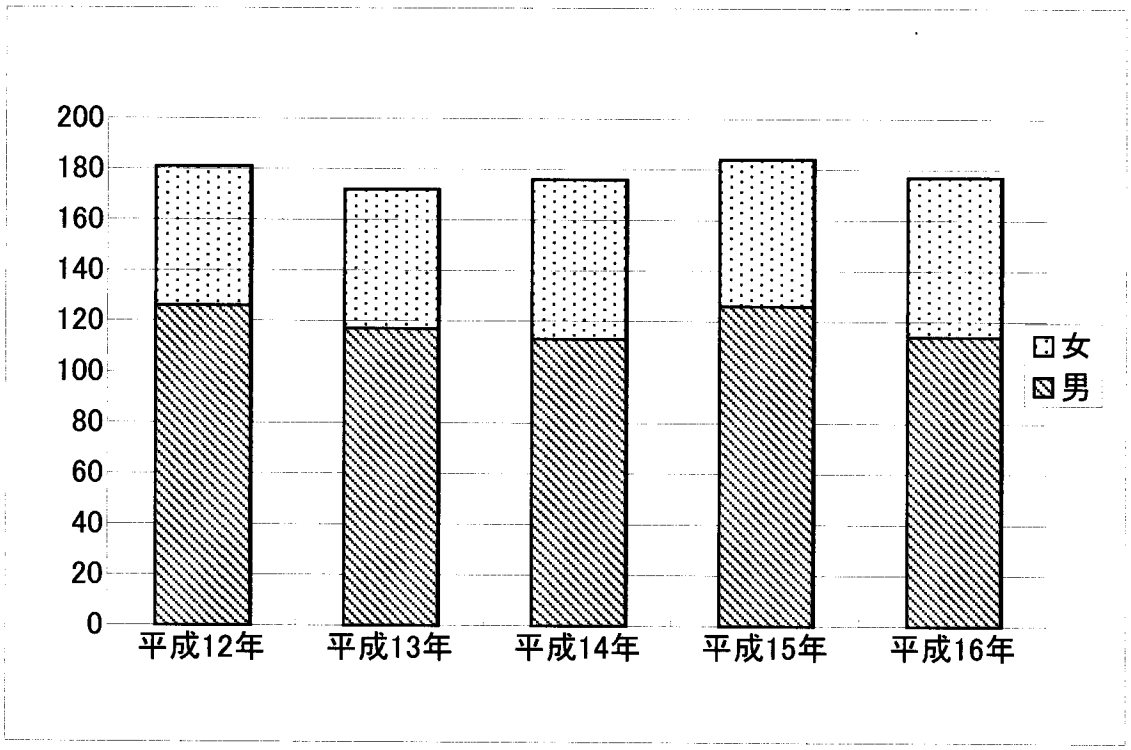
1．男女別留学生数

（各年5月1日現在）

年度	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年
男	126	117	113	126	114
女	55	55	63	58	63
計	181	172	176	184	177

2．外国人留学生の推移

（各年5月1日現在）



3．経費別留学生数

（各年5月1日現在）

年度	国費	私費			計
		政府派遣	県費	その他	
平成12年	59	12	0	110	181
平成13年	60	11	1	100	172
平成14年	52	15	0	109	176
平成15年	58	21	1	104	184
平成16年	43	18	0	116	177

4．外国人留学生学生種別の推移（部局別）

（各年５月１日現在）

種別		年度	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年
正規生	学部学生	人文社会科学部	10	14	12	7	10
		教育学部	2	2	2	3	3
		工学部	23	24	26	34	37
		農学部	3	3	4	4	5
		小計	38	43	44	48	55
	修博士課前程期	人文社会科学研究科	10	12	11	10	9
		教育学研究科	3	9	11	7	9
		工学研究科	12	14	15	12	13
		農学研究科	10	6	3	5	10
		小計	35	41	40	34	41
	博士後期	工学研究科	15	17	18	18	20
		連合農学研究科	52	59	62	57	42
		小計	67	76	80	75	62
	別科	農業別科	1	2			
	正規生合計		141	162	164	157	158
非正規生	学部研究生	人文社会科学部	3		1	4	4
		教育学部	4	4	1	3	1
		工学部	3	2	1	2	1
		農学部	2	1		1	1
		小計	12	7	3	10	7
	大学院研究生	人文社会科学研究科					
		教育学研究科			1	3	2
		工学研究科	2	1		1	
		農学研究科	2				1
		連合農学研究科	2		2	3	1
		小計	6	1	3	7	4
	科目等履修生	人文社会科学部	13	1	3	1	2
		教育学部				1	
		工学部	6				
		農学部					
		小計	19	1	3	2	2
	特別聴講学生	人文社会科学部	1	1		1	1
		教育学部	2		1	1	
		工学部					
		農学部					
		教育学研究科					1
		農学研究科			1		
		小計	3	1	2	2	2
	日本語研修コース生（留学生センター）※					5	1
	日本語・日本文化研修留学生（留学生センター）※				1	1	3
	非正規生合計		40	10	12	27	19
総計			181	172	176	184	177
岐阜大学連合獣医学研究科			4	4	4	3	2

※（留学生センター：2004年4月より国際交流センター）

5．留学生の出身地域・国

（各年　年度末現在）

年度	国別	中国朝鮮			東南アジア								南アジア			中東		アフリカ						東欧・北欧									オセアニア	南北アメリカ								計
		中華人民共和国	大韓民国	モンゴル国	台湾	インドネシア	タイ	フィリピン	マレイシア	ヴェトナム	ミャンマー	カンボディア	スリランカ	ネパール	バングラデシュ	エジプト	イラン	ガーナ	ケニア	スーダン	ナイジェリア	ザンビア	マダガスカル	スロヴァキア	アルメニア	キルギス	フランス	ロシア	ベラルーシ	スウェーデン	アルバニア	チェコ	オーストラリア	ブラジル	ペルー	アメリカ	ボリビア	パラグアイ	ハイティ	アルゼンティン	メキシコ	
11年度	国別数	94	5	3	1	6	1	6	14	2	1		2		13	1		2	2		1						1	1	1	1	1		1	2		1	1					
	小計	102			31								15			1		5						5									1	4								164
12年度	国別数	116	5	3	1	5	1	5	12	3	1	1	2		17			1	3		1				1	1	2	2	1	1	1		1	1			1					
	小計	124			29								19					5						9									1	2								189
13年度	国別数	113	9	1		5	1	4	11	1	1	1	3		13	1			2	1	1				1	1	3	1	1	1	1		1	2			1					
	小計	123			24								16			1		4						9									1	3								181
14年度	国別数	109	9	1		7	2	2	15	3	2	3	2	2	11	1			2	1		1	1	1	1	1		5	1	1	1			2				1	1			
	小計	119			34								15			1		5						11									0	4								189
15年度	国別数	109	11			9	3	2	19	4	1	2	2	1	10	1	1		2	1		1	1	1	1			6	1	1	1	1		2	1				1	1	1	
	小計	120			40								13			2		5						12									0	6								198

留学生センター教職員一覧

1. 平成13年度

留学生センター（学内施設）

センター長	人文社会科学部	教授	岡田　仁
学生部長			児玉　洋祐

日本語教育部門

併任教員	人文社会科学部	教授	菊田　紀郎
	人文社会科学部	助教授	岡崎　正道
	教育学部	教授	大野　眞男
	教育学部	助教授	菊地　悟
	教育学部	助教授	木村　直弘
	教育学部	講師	山崎　友子
協力者（学外）	日本語補講講師		堤　千乃
	日本語補講講師		中村　ちどり

留学生相談部門

併任教員	人文社会科学部	教授	三浦　勲夫
	工学部	講師	小笠原　洋光
	保健管理センター	助教授	早坂　浩志
	連合農学研究科	教授	玉　真之介
	人文社会科学部	教授	菊地　良夫
	教育学部	教授	今関　由紀子
	工学部	助教授	藤田　尚毅
	農学部	教授	上村　松生
協力者(学外)	留学生カウンセラー		小野寺　和子

国際・地域交流部門

併任教員	教育学部	教授	福井　正明
	連合農学研究科	教授	玉　真之介
	人文社会科学部	講師	秋田　淳子
	教育学部	助教授	藪　敏裕
	工学部	教授	熊谷　直昭
	農学部	教授	平　秀晴

	農学部	助教授	原　道宏
協力者（学外）	国際交流アソシエート		尾中　夏美

学生部教務課留学生係

係長	村上　榮子
事務官	中山　弘光
事務補佐員（国際交流会館担当）	佐藤　由紀

2.　平成 14 年度

留学生センター（省令施設）

センター長	人文社会科学部	教授	岡田　仁
専任教員	教授		岡崎　正道
	助教授		小笠原　洋光
	助教授		尾中　夏美
	助教授		松岡　洋子
	助教授		中村　ちどり

全学共通教育科目「日本語」講師

教育学部	教授	大野　眞男
教育学部	助教授	菊地　悟

日本語補講講師（学外）

大高　久枝
松林　和美
大畑　佳代子
山屋　頼子

学生部留学生課

留学生課	課長	佐藤　洋正
	専門職員（留学生担当）	高橋　幸雄
留学生係	係長	村上　榮子
	事務官（兼務）	常川　里美
	事務補佐員（国際交流会館担当）	佐藤　由紀
留学生センター係	係長（兼務）	高橋　幸雄
	総務主任	中山　弘光

留学生センター運営委員会運営委員

人文社会科学部	教授	三浦　勲夫
教育学部	教授	大野　眞男
工学部	助教授	藤田　尚毅
農学部	教授	平　秀晴
連合農学研究科	教授	玉　真之介

3. 平成15年度

留学生センター（省令施設）

センター長	人文社会科学部	教授	岡田　仁
専任教員	教授		岡崎　正道
	助教授		小笠原　洋光
	助教授		尾中　夏美
	助教授		松岡　洋子
	助教授		中村　ちどり

学内非常勤講師（特別コース担当）

人文社会科学部	教授	菊田　紀郎
人文社会科学部	助教授	橋本　学

全学共通教育科目「日本語」担当講師

教育学部	教授	大野　眞男
教育学部	助教授	菊地　悟

学外非常勤講師　大高　久枝
坂本　淳子
松林　和美

特別コース講師（学外）　大畑　佳代子
山屋　頼子
小野寺　淑

学生部留学生課

留学生課	課長	佐藤　洋正
	専門職員	吉田　京

留学生係	係長	橋本　美佐子
	事務補佐員（国際交流会館担当）	田名部　洋子
留学生センター係	係長(兼務)	吉田　京
	事務官	太田　剛

留学生センター運営委員会運営委員

人文社会科学部	教授	三浦　勲夫
人文社会科学部	教授	笹尾　道子
教育学部	助教授	菊地　悟
工学部	助教授	藤田　尚毅
農学部	教授	平　秀晴
連合農学研究科	教授	玉　真之介

日本語特別コースと留学生教育

松岡洋子（岩手大学国際交流センター）

1．岩手大学日本語特別コース設置の経緯

岩手大学では、留学生センター設置以前から、学部学生対象の全学共通教育科目、人文社会科学部専門科目および補講として、外国人留学生のための日本語教育が実施されてきたが、時間数、レベル、技能など、多様な留学生のニーズに応えることは困難であった。そこで、2002年度の留学生センター設置に伴い、留学生に対する日本語教育をさらに充実させるため、2002年度後期に日本語特別コースが開設された。このコースは、全学の留学生とその家族および外国人研究員、教員など、岩手大学に在籍、関係する全ての外国人を対象としている。

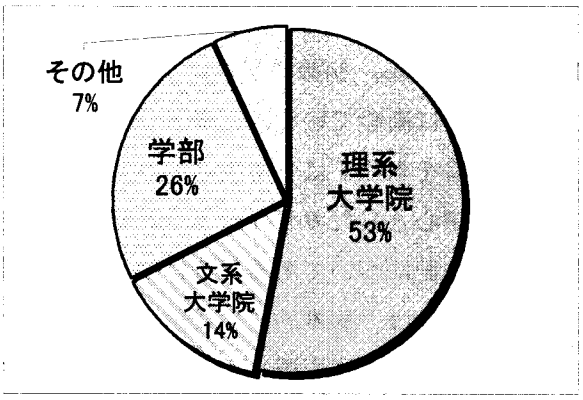


図1　所属身分別留学生分布（2003年10月時点）

岩手大学の外国人留学生の過半数（平成15年10月現在では）は理系大学院に在籍している（図1参照）。学部の正規留学生の場合、入学選抜時に日本語能力が問われる[i]が、理系大学院では日常会話程度の日本語力で十分とする研究科が大半である。そのため、日本語能力がほとんどない状態で研究生として入学し、半年ないし1年後に大学院に進学する留学生が多いのが実状である。すなわち、日本語能力が低い留学生が多数存在するということである。理系大学院では研究は英語で進めることが可能なことが多いが、実際に学生生活を送る上で基礎的な日本語力が必要となる。たとえば、指導教官や研究室の学生との日常のコミュニケーションは日本語ができない場合、非常に困難をきたす。さらに、研究生活上、専門的な日本語能力が要求されるケースもある。従前、大学院レベルの留学生は市中のボランティアによる日本語学習支援を受けたり、数少ない学内の補講を受講したり

して、日本語能力の習得に努めてきたが、多忙な研究生活の合間にわずかな機会を活用し日本語学習を継続するのは困難である。

近年、留学生数の増加とともに日本語教育に対する留学生の要望も高まり、日本語初学者向けから上級レベルまで幅広いレベルの学習機会を提供するために、2002年度の留学生センター設置と同時に留学生センター日本語特別コースが開設された。本コースの設置により、留学生、研究員とその家族は、レベルに応じ、ある程度まとまった日本語学習機会を得られるようになった。

2．コースの概要

2．1　開講クラス

本コースは、毎学期全レベルの授業が提供され、多様な学生に対応している。クラスは初学者対象の「初級Ⅰ」、初級前半終了者対象の「初級Ⅱ」、初級終了者対象の「中級Ⅰ」、中級前半終了者対象の「中級Ⅱ」、そして「上級」の５つのレベルがあり、受講者はプレースメントテストの結果によって各自の能力やニーズに応じたレベルの授業を受講する。

授業は１学期 15 週間実施される。演習形式の授業が中心となるため、各授業の定員は初級 10 名、中級以上は 15 名としている。初級クラスは２コマ１回の授業を週２～3 回受講し、総合的な日本語能力を効率的に高めていく。初級Ⅰレベルでは、そのときの受講者の日本語ニーズにより、文字の習得を求めずに日常生活のコミュニケーション能力獲得のためのサバイバルジャパニーズを中心としたカリキュラムを組む場合と、将来の段階的な日本語学習のために、言語構造、表記についてある程度の知識、技能習得を求めるカリキュラムで対応する場合がある。初級Ⅱは、基本的には言語構造を基軸としたカリキュラムで対応し、初級Ⅰと同様、２コマ１回の授業を週２～３回実施する。中級は言語機能、文法、会話・聴解技能などを総合的に学習するクラスのほかに技能別クラスが実施されている。同じく上級は技能別クラスで、大学の通常授業に参加するため、あるいは研究を行うために必要な実用的な技能を学ぶ。なお、上級に限り、全学共通教育外国語科目としての上級日本語との並行開講であるため、通年受講で終了するようにカリキュラムが構成されているが、前期、後期いずれから受講を始めても問題がないように配慮している。

開講当初は科目数が少なく、各レベルの内容が不足していたが、2003 年度以降は各レベル１学期約 150 時間の学習時間を確保するよう再構成した。日本語特別コースは受講者が希望に応じて１学期ごとに日本語のスキルアップが図れるように対応している。

毎学期、前学期の反省に基づいた改定と各学期の受講者状況によって内容の変更があるが、2003 年度後期オリエンテーションで配布した授業概要資料は、以下のようなものである。なお、上級については全学共通教育と共通のため、ホームページ上に説明が載せられている。

初級Ⅰ　-Beginner-

科目名	内容	定員
初級Ⅰ総合	初めて日本語を勉強する人が対象です。初歩的な文法について勉強し、日本での生活に必要ないろいろな場面での会話ができるようにします。　**テキスト：『はじめのいっぽ』（スリーエーネットワーク）ほか**	10
初級Ⅰ漢字	初めて漢字を勉強する人が対象です。およそ200字程度の基礎的な漢字の読み書きを練習します。 **テキスト：『Basic Kanji Book Vol.1』（凡人社）**	10

初級Ⅱ　－Elementary high－

科目名	内容	定員
初級Ⅱ総合	日本語を150時間程度学習した人が対象です。初級後半レベルの文法を勉強し、日常生活に役立つ会話ができるようにします。簡単な読み書きも勉強します。 **テキスト：『みんなの日本語Ⅱ』（スリーエーネットワーク）**	10
初級Ⅱ漢字	初級漢字150字～200字程度学習した人が対象です。およそ300字程度の基礎的な漢字の読み書きを練習します。 **テキスト：『Basic Kanji Book Vol. 2』（凡人社）**	10

中級Ⅰ　－Intermediate low－

科目名	内容	定員
中級Ⅰ総合	初級終了者が対象。初級で学習した文法を復習しながら中級レベルの文法を学習し、総合的な日本語力を高めます。 **テキスト：『現代日本語コース中級Ⅰ』（名古屋大学出版会）**	15
中級Ⅰ読解	毎日の生活に必要な基礎的な書きことばを学習し、簡単な文章を読んで理解できるようにします。　**テキスト：（授業で指示）**	15
中級Ⅰ会話	身近な話題についての話を聞き取り、自分の持っている情報や意見を伝えることができるようにします。 **テキスト：『なめらか日本語会話』（アルク）**	15
中級Ⅰ作文	初級後半から中級前半レベルの文法項目を使い、日常生活で使う、手紙、メモなどが書けるようにします。　**テキスト：（授業で指示）**	15
中級Ⅰ漢字	初級漢字500字程度の学習をした人が対象です。800～1000字程度の漢字の読み書きを練習します。 **テキスト：：『Intermediate Kanji Book Vol.1』（凡人社）**	15

中級Ⅱ　－Intermediate high－

科目名	内容	定員
中級Ⅱ総合	初級の学習が終わった学習者が中級から上級へレベルアップするために必要な機能、文法などを学習します。 **テキスト：『現代日本語コース中級Ⅱ』（名古屋大学出版会）**	15
中級Ⅱ読解	日本語で書かれた専門的な文章、論文などを読むための基礎的な表現や文構成について学習します。 **テキスト：『大学・大学院留学生のための日本語１読解編』（アルク）**	15
中級Ⅱ作文	中級で学習する文法項目を使って、大学で学習するために必要な文章力を高めます。 **テキスト：『大学・大学院留学生のための日本語２作文編』（アルク）**	15
文系日本語	文系の専門日本語の基礎について学習します。 **テキスト：（授業で指示）**	15
理系日本語１・２	理系の専門日本語の基礎について学習します。 **テキスト：ハンドアウト**	15

２．２　オリエンテーション

受講希望者には、学期始めに実施されるオリエンテーションへの参加が義務付けられている。ここでは、コースの履修方法、各授業の概要説明の後、プレースメントテストが行なわれる。平成 14 年度後期のオリエンテーションは日本語と簡単な英語での説明のみで実施したが、平成 15 年度前期以降は英語および中国語の通訳をつけて対応した。オリエンテーションは毎学期２回実施されるが、諸事情で参加できない学生に対しては担当教員が個別に対応している。オリエンテーションでは、日本語特別コースの受講方法、手続きの手順、授業内容，教科書、時間割、履修上の注意事項などが説明され、受講希望者の質問に応じている。

オリエンテーション時に受講希望者は、氏名、出身、所属、日本語学習歴などを記入した「受講申請書」を提出する。また、研究生、大学院生には、指導教官からの「受講承諾書」の提出を求めている。これは、留学生の日本語学習に対する指導教官の理解と認識を深める意味があり、留学生が気兼ねなく日本語学習を継続できることにつなげるためのものである。

２．３　プレースメントテスト

オリエンテーション終了直後に、プレースメントテストを実施する。テストには初級用、中級用の２種類があり、受講希望者の申告により、いずれかを受験する。初級用は日本語

能力試験3級程度、中級用は同じく2級程度のレベルの漢字、語彙、文法、読解力を測定するもので、担当者が毎学期作成し、実施している。受講希望者はその成績により受講クラスが振り分けられる。なお、前学期に日本語特別コースを受講し、所定の成績を修めた者は翌学期のプレースメントテストは免除される。したがって、オリエンテーション参加者のうち、プレースメントテスト受験者は半数以下である。試験結果は当日夕方、あるいは翌日午前中までに掲示板上で通知され、受講希望者はその結果を見て、各自の授業や研究の空き時間と照らし合わせて受講クラスを決定する。担当教員はクラス決定時には相談を受け付け、適宜助言を行う。受講希望者の中には特定のスキルのみをのばしたいと希望する者や、複数のレベルにわたって同時に受講を希望する者もあるが、受講希望者の日本語能力や諸事情を勘案して履修計画を作成する。

3．受講者

受講者は、レベルにより特徴が見られる。初級は、理系研究生、研究員、家族が中心で、学習を継続してレベルアップすることではなく、日常生活に役立つ日本語力を早く身につけることを希望する受講者が多い。中級には研究生が多い。こちらは初級と異なり、システマティックな学習によりレベルアップを希望する学習者が中心となる。上級は、短期留学の学生が多く、自国での日本語学習を継続し、研究に役立つレベルまで向上させることを希望する。なお、上級クラスは全学共通教育外国語科目としての「上級日本語」と並行しての開講であり、実際のクラスは学部学生が中心となっている。受講者の中には、研究等が忙しく、授業外の学習時間を確保することが困難な受講者も多く、その場合には、宿題などを課さずに授業内でできるだけ対応するようにしている。

4．平成14年度から平成15年度の実施状況

岩手大学留学生センターの設置は平成14年4月であったが、新任専任教員の赴任が同年6月になったため、同年前期は6月から8月まで変則的な補講授業が実施された。日本語特別コースが正式に設置されたのは、2002年度後期以降である。

平成14年度後期から平成15年度後期までの3学期分の実施状況は以下の表1～3に示すとおりである。授業の概要は、先に表で示したとおりである。2002年度後期は、初級受講者が中級後半に比べて多いが、これまで市中のボランティア教室で学習していた家族や研究員などが日本語特別コースの開講と共に受講を始めたことによる。平成15年度以降は中級以降の学習者が増加したのは、平成14年年度後期から始まった大学院入学予備教育日本語研修コースの修了者が日本語特別コース中級クラスに合流し始めたためである。平成15年度から開講している上級クラスの受講者数は、全学共通教育外国語科目として履修している学習者数を除いたものである。また、平成15年度後期には開講科目を増やしたために受講者数も増加している。

表１　＜平成 14 年度後期＞　　（人数は延べ人数。以下同様）

科目名	内容・教材	受講者数
初級Ⅰ総合	『文化日本語初級Ⅰ』(凡人社)	14
初級Ⅱ総合	『文化日本語初級Ⅱ』(凡人社)	11
中級Ⅰ読解	『大学・大学院留学生の日本語１．読解編』(アルク)	12
中級Ⅰ会話	『日本語中級総合講座』(アルク)	15
中級Ⅱ読解	『大学･大学院留学生の日本語３．論文読解編』(アルク)	8
中級Ⅱ会話	『ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語会話』(アルク)	8
理系日本語	自然科学分野の専門語彙	2
中上級文法	『ポイント整理日本語文法』(アスク講談社)	11
計　14 コマ		81

表２　＜平成 15 年度前期＞

科目名	内容・教材	受講者数
初級Ⅰ総合	『みんなの日本語・初級Ⅰ』(スリーエーネットワーク)	4
初級Ⅱ総合	『みんなの日本語・初級Ⅱ』(スリーエーネットワーク)	6
中級Ⅰ総合	『日本語中級Ｊ３０１』(スリーエーネットワーク)	20
中級Ⅰ会話	『らくらく日本語会話』(アルク)	17
中級Ⅰ作文	手紙、レポートの書き方等	12
中級Ⅰ読解	『日本語中級読解』(アルク)	15
中級Ⅱ総合	『日本語中級Ｊ５０１』(スリーエーネットワーク)	15
中級Ⅱ読解	『大学･大学院留学生の日本語　１．読解編』(アルク)	15
中級Ⅱ作文	『大学･大学院留学生の日本語　２．作文編』(アルク)	6
理系日本語	自然科学分野の専門語彙	5
上級会話	講義の聞きとり方、討論の仕方	6
上級読解	『大学・大学院留学生の日本語３．論文読解編』(アルク)	3
上級作文	『大学･大学院留学生の日本語　４．論文作成編』(アルク)	1
計 24 コマ		125

表３＜平成 15 年度後期＞

科目名	内容・教材	受講者数
初級Ⅰサバイバル	『はじめのいっぽ』（スリーエーネットワーク）	5
初級Ⅱ総合	『みんなの日本語・初級Ⅱ』（スリーエーネットワーク）	6
初級Ⅱ漢字	『Basic Kanji vol.2』（凡人社）	5
中級Ⅰ総合	『現代日本語コース中級Ⅰ』（名古屋大学出版会）	19
中級Ⅰ会話	『らくらく日本語会話』（アルク）	24
中級Ⅰ作文	手紙、レポートの書き方等	12
中級Ⅰ読解	新聞、雑誌の読解	13
中級Ⅰ漢字	『Intermediate Kanji vol.1』（凡人社）	8
中級Ⅱ総合	『現代日本語コース中級Ⅱ』（名古屋大学出版会）	22
中級Ⅱ読解	『大学･大学院留学生の日本語　１．読解編』（アルク）	10
中級Ⅱ作文	『大学･大学院留学生の日本語　２．作文編』（アルク）	16
理系日本語	自然科学分野の専門語彙	1
文系日本語	人文／社会科学分野の専門知識	16
中上級文法	『日本語文法問題集』（アルク）	12
上級会話	プレゼンテーション技法	8
上級読解	新聞、論文読解	7
上級作文	『大学･大学院留学生の日本語　４．論文作成編』（アルク）	8
計 30 コマ		192

５．日本語特別コースの課題

５．１　開講科目

平成 15 年度後期には各レベルにおいてほぼ標準学習時間分の科目を開講することができた。しかし、各学期の学習者のニーズや状況に応じて、開講科目の構成を対応させる必要がある。講師数が十分確保できる場合には、受講者数の少ない科目でも開講させ、ニーズへのより細かな対応が可能であるが、現状でも開講コマ数の約３分の１をセンター専任教員以外に依存しているため、予算の都合上、これ以上の科目の新設は不可能である。たとえば、ある学期にサバイバルレベルの集中講座の受講希望者と、週に２、３日の継続的な初級クラスの受講を希望する学習者がいた場合、同一レベルの類似したクラスの開講は困難になり、どちらかのニーズは満たせないことになる。留学生数が増加した場合には、文部科学省からの留学生特別配分予算等を利用して特別コースのクラスを増加させること

も検討可能だが、現状では困難である。また、講師の専門性との関連で、開講科目が制限されることもある。毎学期、どのような科目を開講すべきか取捨選択を迫られ、学期開始後にも変更を余儀なくされることも多いが、このような課題を解決する方法は現在も模索中である。

5．2　講師の確保

先述したように、学習者ニーズの多様性、講師の専門性、予算等との関連で、十分な授業数を確保するのは困難である。留学生センターでは、専任教員全員が日本語教育に携わっているが、全員が日本語教育の専門家として配置されたのではなく、日本語特別コース担当としての人員は不足しているのが現状である。他学においては、非常勤、謝金講師の活用によって日本語教育が充足され、日本語教育以外の人員として配置された教員はそれぞれの業務に専念している。岩手大学留学生センターの規模では、あらゆる業務を全員で分担して行うことがしばしば求められるが、日本語特別コースの効率性、効果を高めるために、現在の方法が適切であるのか検討を要すると思われる。

5．3　開講時間帯

平成14年度以前には、日本語教育は補講として午後の遅い時間帯に開講されることがほとんどであった。これは、通常授業が終わった後に補講を受講する受講者が多いと考えられていたためである。しかし、受講者に面接調査したところによると、日本語クラスの受講希望時間帯は多様であることがわかった。たとえば、理系の研究生、研究員の場合、午後からは実験が忙しくなるため、午前中の時間帯のほうが出席しやすいという一方、授業が終わった後で夕方から学習を希望する学部生、文系の大学院生も存在する。また、アルバイトをしている私費留学生の場合には、午後遅い時間帯の受講は不可能であるということであった。以上のような事情を勘案し、日本語特別コースは、原則として通常授業と同時間帯に開講している。どの時間帯に開講しても、都合のつかない受講者が出るのは不可避である。できるだけ受講者数の多い時間帯を調査した結果、現行の状態になった。しかし、現状では受講できない受講希望者も存在するであろう。このような学習者へ、日本語特別コース以外にどのような日本語学習支援が行えるのか検討しなければならない。

5．4　施設、設備

日本語特別コースは演習中心の授業であるため、1クラスの受講者数を15名程度にしている。授業は学生センター演習教室を中心に実施しているが、教室確保が毎学期困難になっている。現在、専門授業を中心に演習形式の授業が増加傾向にあり、そのため、演習教室が不足している。留学生センターでは、全学共通教育係の協力を得て、毎学期の教室確保を行っているが、常時、日本語特別コースために確保できる教室は10名収容すると手狭な

1室のみである。他学の留学生センターでは、専用の教室が確保されているのが通常だが、岩手大学では留学生センター占有の施設、設備はわずかであるため、上述のような問題が起こっている。教材等も十分ではなく、今後、施設、設備の充実が大きな課題であると考える。

5.5　多様な教育プログラムへの対応

岩手大学の留学生数は200名足らずである。しかし、留学生センター設置以降、(大学院入学前予備教育) 日本語研修コース (研修コース) の設置をはじめ、さまざまなプログラムへの対応が迫られている。平成15年度現在、留学生センターで行われている日本語教育関連のプログラムは、研修コースのほかに、日本語・日本文化研修コース、日韓共同理工系学部留学プログラム日本語予備教育があるが、このほかに、各学部が実施している短期留学推進プログラムや交換留学、インターンシップ等によって交流協定校から来日した学生に対する日本語教育、大学院生、研究生、研究員等に対する日本語教育も依頼される。このような多様なニーズに対し、ひとつひとつ新しいコースを設置して対応することは不可能である。そのため、各学習者に対応した日本語履修指導を行い、日本語特別コースの中の必要な授業に参加させて対応しているのが現状である。日本語特別コースは、補講として行われてきたが、本コースがなければ各種留学生の日本語教育プログラムは実施できない状況にある。そのため、平成16年度以降、短期留学特別プログラムの学生を主な対象とした国際交流科目[ii]に日本語特別コースの各科目を移行することになった。国際交流科目として日本語授業を登録すれば、正式な単位が必要な受講者には単位を認定することができるようになる。また、単位が不要な受講者は従来どおり受講するだけでもよい。このシステムが平成16年度以降、どのように活用されるか注目したい。

5.6　全学への周知方法

留学生センター設置以降、留学生教育に長年携わっている教員には、日本語特別コースの有用性も理解されつつあるようだが、留学生を受け入れた経験のない教員、研究室では日本語教育に対する認識が不足気味で、留学生の日本語学習に対する要望をそれほど重視しないこともある。研究第一であり、日本語学習に時間を割くことに対して抵抗感のある教員も多いのではないだろうか。また、日本語は生活をしていれば自然に身につくものであり、誰にでも教えることのできるものだという考え方が一般的であろう。しかし、効果的、効率的に日本語習得を進めるために留学生センターは日本語教育を実施しており、その有用性について、全学的に周知する必要性を感じる。今後、学生数の減少が予想される中で、留学生の存在は決して軽視できるものではない。現在でも、理系の大学院では留学生の存在が大きいものになっている。是非、留学生センターの日本語教育を活用して欲しいものである。

現在は、ホームページとポスターによって、各学期が始まる前に日本語特別コースの実施について周知させている。また、先ほど述べたように、日本語特別コースの受講を希望する大学院生、研究生には、指導教員からの受講承諾書の提出を依頼している。さらに、各学期の終わりには、学生の日本語学習の成績を指導教員宛にメールにて連絡している。今後は、簡単なチラシ等を作成して、全教員に日本語特別コースについて周知し、さらに詳細な情報をホームページ上で検索できるよう整備したい。

6．留学生に必要な日本語と日本語特別コース

以上、日本語特別コースの設置経緯から現在の課題まで概観してきた。最後に、全学の留学生、外国人研究者等を対象とする日本語特別コースでは、どのような日本語教育を行えばよいのか検討したい。

近年、日本語教育の研究分野に専門日本語教育研究というのが現れてきた。そこでは、大学における日本語教育が日本語学校等の日本語教育専門機関の日本語教育とどのように異なるのか、どのように特化すべきなのかについて議論され、「アカデミックジャパニーズ」という用語が使用されるようになった。アカデミックジャパニーズとは、留学生が大学等の高等教育で学習、研究するために必要な専門的な日本語能力、論理的な思考力を支える日本語力を示す。日本語特別コースが目指す日本語教育はこのアカデミックジャパニーズ能力の習得、向上にあると言える。たとえば、初めて日本語を学習するサバイバルレベルの学習者にとっても、単に生活に必要な基礎コミュニケーション力の習得ということではなく、大学の研究生活を想定した場面、そこで必要となる言語機能、文型、語彙などを積極的に取り上げていく内容が望ましい。現在の市販教材には、大学院生や研究者に対象を特化したものは少ない。現在、日本語特別コースでは汎用性の高い市販教材を主教材に選定しているが、その見直しも含めて改定が求められるところである。また、中級レベル以上では、学習者の目的別に学習内容が多様化していくが、現在の学習内容では十分に対応しきれていない。究極的には個別指導が理想であるが、クラス単位の指導においても学習者の専門性に配慮した学習内容に近づけるよう教材の整備が必要である。現在、専門日本語教育研究会をはじめ専門分野でのアカデミックジャパニーズ研究が進められているが、その成果を活用し、研究生活に不可欠な日本語文型、語彙等言語形式の学習と技能別のスキルアップ教育を充実させたい。そのためには、学内外の各専門分野の教員との連携が重要である。専門用語は分野ごと細かく異なり、留学生や研究者が独自に習得する以外に方法はないと考えるが、基礎的な日本語力には大きな共通項があると考えられる。日本語特別コースでは、その共通項の教育を行うことができるだろう。アカデミックジャパニーズの効率的、効果的な教育のためには現在の授業構成が適切かどうかも検討すべきである。

さらに、日本語特別コースの実施形態についても検討の余地がある。現在は、クラス単位で、一部の授業を除き学習者の専門性に配慮せずに一斉授業を行っている。しかし、レ

ベルが向上するに従って一斉授業と個別課題解決の時間を融合した授業が求められるようになるのが当然である。これを実現するには、新たな教材作成が不可欠である。また、クラス授業だけでなく、コンピュータやインターネットを利用した自主学習用教材とその支援教育システムの構築の開発も求められる。このように多様な教育支援を行うことで、時間に拘束されずに留学生、研究者の必要な日本語習得が進められるようになるであろう。現在、工学部三輪研究室では、「iCampus」というネット上の日本語学習支援システムの開発が進められている[iii]。日本語特別コースでは、単に現行の学習プログラムを維持するだけでなく、このような各種システムの有効利用をはじめ、新しい独自の日本語学習支援体制を構築していくために、全学から教育効果についての評価を得ながら、研究、実践を継続させたい。

---

[i] 平成 14 年度以降は日本学生支援機構（前国際教育協会）が実施する日本留学試験日本語科目 180 点以上の日本語能力が入学条件となっている。

[ii] 国際交流科目は平成 16 年度より『学習の手引き（二〇〇四年度版）』（岩手大学）に掲載されるようになった新設科目群である。主に、短期留学プログラムの学生を対象として、英語による授業を行うことを目的に設置された。この中には日本語の初級 I から中級 II レベルまでの授業も含まれ、平成 16 年度後期からは正式に単位認定が行われる予定である。

[iii] http://www.sp.cis.iwate-u.ac.jp/icampus/index.jsp

日本語研修コースにおける日本語教育

中村ちどり（岩手大学国際交流センター）

1. はじめに

岩手大学で初めての日本語研修コース生を受け入れてから 2 年が過ぎようとしている。コーディネーターとしての筆者の担当もこの秋から 5 度目になる。ここでは、留学生センターにおける日本語研修コースを振り返り、その概要と課題について述べる。

1.1 日本語研修コースとは

日本語研修コースは、大学院入学前予備教育としての日本語教育を行うものであり、毎年 4 月と 10 月に開講される半年間の日本語集中教育プログラムである。岩手大学では留学生センターが文部科学省の省令施設となった後の平成 14 年 10 月から毎学期「外国人留学生日本語研修コース」を開催し、北東北地方の大学に配属予定の留学生を受け入れている。

研修コースの受講対象者は、大使館推薦を受けた国費研究留学生と教員研修留学生であり、留学生センターで半年間の集中日本語教育を受けた後、専門教育を行う各研究科に配属される。教員研修留学生の場合は、1 年間教育学部で教育実習を含めた研修を受け、大使館推薦の国費研究留学生は大学院での 1 年間の研修または修士・博士課程に進学する。予備教育としての日本語研修コースは、これらのニーズに沿った日本語教育プログラムを提供するものである。

岩手大学留学生センターでは、平成 14 年度後期から平成 15 年度後期までの 3 学期間に 3 回研修コースを開講し、合計で 19 名の受講生を迎えた。このうち 4 名が秋田大学、1 名は北里大学配属の学生である。

1.2 岩手大学日本語研修コースの特色

研修コースは、文部科学省の省令施設である全国の留学生センターで行われてきたプログラムであるが、岩手大学留学生センターの日本語研修コースの特色としては次のような点が挙げられる。

まずカリキュラムに関しては、週当たりの日本語授業時間が 12 コマ相当（1 コマ 90 分）と比較的少ない。これに対し日本語以外のコンピュータや日本事情などの授業が豊富である。また夏期・冬期休業期間中にも補習授業を行うため、1 学期あたりの学習時間は 20 週程度と長くなっている。

次に生活面での特色としては、チューター制度と盛んな地域交流により、留学生と日本人との交流が多く知り合いが作りやすいということがある。在住外国人が少ない地方都市

における「外国人どうしの友人が作りにくい」「外国人のコミュニティーがないため孤独に陥りやすい」といったマイナス面を解決するためには、このような生活支援が欠かせない。

以下、留学生センターで平成 14 年度から 15 年度に行った日本語研修コースの概要について述べていく。

2. 受講者

受講登録者は、平成 14 年度後期 8 名、平成 15 年度前期 5 名、平成 15 年度後期 6 名で、計 19 名であったが、このうち平成 15 年度後期の 2 名が途中で受講をとりやめたため、コース修了者は全体で 17 名である。受講登録者数とその内訳は次のようになる。

表 1. 平成 14～15 年度研修コース受講者数

年・学期	大使館推薦（国費）	教員研修	大学推薦（国費）	私費	合計
14 年後期	2	4	2	0	8
15 年前期	5	0	0	0	5
15 年後期	0	4	2(2)	0	6(2)
合計	7	8	4(2)	0	19(2)

※ ( )内は、修了しなかった者

教員研修生の受け入れは年 1 回で後期のみのため、前期は大使館推薦の国費研究生が中心となり、後期は教員研修生が多くなる。またこれ以外にも、岩手大学では「センターが認めた留学生」の受講を認めており、大学推薦国費研究生と私費留学生の希望者のうち、開講されるクラスとレベルが合う場合には、指導教官とセンター長の許可を得て受講することができる。この措置によって受講した学生は 4 名であるが、そのうちの 2 名は学期が始まってすぐ専門研究との両立が難しいことがわかり、他のコースに移っている。

受講生の研修後の配属先である大学院研究科を示すと、次の表のようになる。

表 2. 受講生の専門教育配属先

年・学期	人文科学系	教育学系	工学系	農学系	水産学系	合計
14 年後期	1	4(1)	1	2	0	8(1)
15 年前期	0	0	2	2	1(1)	5(1)
15 年後期	0	4(2)	1	1	0	6(2)
合計	1	8(3)	4	5	1(1)	19(4)

※( )内は、岩手大学以外の大学（秋田大学、北里大学）

各自の専門領域に合わせた配属がなされているため、コース修了者は文系から理系まで多様な研究科に進む。受け入れが最も多いのは教員研修を行う教育学研究科であるが、修士

課程・博士課程への進学を目的とした研究留学生は、ほとんどが農学系か工学系研究科の学生となっている。水産学系の1名は北里大学への配属である。

各学期の受講生の国籍と職業、年齢、性別は次のとおりである。

(1) 平成14年度後期：

中国2（教師29才男、学生25才男）、フィリピン1（教師29才男）、ネパール1（教師34才男）、パラグアイ1（教師31才女）、インドネシア1（教師28才男）、ミャンマー1（公務員28才女）、マダガスカル1（会社員26才男）

(2) 平成15年度前期：

フィリピン1（教師34才男）、アルゼンチン1（会社員23才男）、ザンビア1（教師34才女）、ミャンマー1（公務員34才男）、ブラジル1（公務員24才男）

(3) 平成15年度後期：

バングラディシュ2（教師28才男、助手28才男）、インドネシア1（教師34才女）、メキシコ1（教師29才女）、ベトナム1（教師27才女）、ペルー1（教師31才女）

受講生の国籍はアジア地域が最も多く、中国、ミャンマー、インドネシア、フィリピン、バングラディシュが各2名ずつ、ネパールが1名の計11名である。南米のパラグアイ、アルゼンチン、ブラジル、メキシコ、ペルーからも各1名、計5名の学生を受け入れた。アフリカからの留学生が最も少なく、ザンビア、マダガスカルから各1名、合計2名の学生が受講した。ヨーロッパ・北米からの受講者はいなかった。

性別は、全体では男性12名女性7名で、男性のほうが多いが、教員研修留学生は男性3名女性5名と、女性のほうが多くなっている。

年齢については、23才から34才まで、幅広い年齢の学生を受け入れた。20才～25才が3名、26才～30才が9名、31才～35才が7名である。26才～30才が最も多いが、大使館・大学推薦の留学生に応募できるギリギリの年齢である34才の学生も5名と数が多い。35才以上の学生は、国費の大学院研究留学生として受け入れられないため受講者とはならない。

受講生の出身国での身分・職業は、教員が最も多く11名である。そのうち大学で教える者が最も多く4名、高校と中学・小学校が各2名ずつ、幼稚園が1名である。また、学生が1名、大学の助手が2名おり、これらを含めると学校関係者が全体の3分の2以上を占める。この他の受講者は会社員（エンジニア）が2名、公務員が3名である。

以上からわかるように、日本語研修コース受講生の専門、国籍、年齢は多様である。職業は多くが教員・研究者であるが、その専門分野は多岐に亘る。これは、日本語クラスの運営という観点から見ると、いくつかの難しい点を持つ。まず専門分野ごとに異なった語彙・日本語力が必要になるため、受講者ごとにニーズが異なる。また年齢差や漢字圏・非漢字圏出身の差によって、日本語学習能力にも著しい差がある。さらに受講者の母語・既習外国語が異なるため、全員がわかる英語などの媒介語がない。しかし、限られた予算で

全ての受講生のニーズ・能力に合わせたクラス編成をすることはできないのが現状である。次節では、岩手大学における日本語研修コースのカリキュラムについて述べる。

3. カリキュラム

3.1 スケジュール

(1) 授業日程

平成14～15年各学期の授業日程・行事のスケジュールは、概ね次のようになった。

第1週	学生受け入れ
	個別オリエンテーションとプレイスメント・テスト
第2週	開講式、ひらがなクラス開始
	留学生オリエンテーション、留学生懇親会、
第3週	総合日本語クラスとかたかなクラス開始
第4週	漢字クラス開始
夏／冬休み（各2～4週間程度）	
	留学生見学旅行／スキー研修
第15週	修了テスト
第16週	修了発表会
第17週～学期末	補習授業
学期末	修了式

受講生受け入れとプレイスメント・テストの後、日本語授業が始まり15～16週程度続けられる。この間、夏休みには留学生見学旅行、冬休みにはスキー研修旅行が開かれた。

15週の日本語授業の後、受講生は修了テストを受け、成績が決定する。その後、スピーチ発表準備の個別授業を経て、修了発表会で各自スピーチを行う。これ以降は岩手大学の通常授業が行われない補講期間・休業期間になるため、平成14年度後期は授業を行わなかった。だが、ほとんどの受講生が日本語学習の継続を希望したため、平成15年度からは学期末まで週に4コマ～8コマ程度の補習授業を続けている。

(2) 時間割

岩手大学留学生センターでは、日本語研修コースの授業は1クラスのみ開講準備を行っており、平成14年度後期と平成15年度前期は学習者のレベルが一様だったため、1クラスのみの開講となった。レベルは初級前半であり、日本語のカナ入門から初級終了までをカバーしている。留学生センターで開講した入門～初級終了までのクラス（以下、初級Ⅰと呼ぶ）の時間割は、ひらがなカタカナの集中クラスが終わった後に、概ね次のように開講された。

表 3. 初級 I クラス時間割（入門～初級終了）

	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)
I (9:00～10:30)	総合	総合	読解・作文	総合	総合
II (10:30～12:00)	総合	総合	読解・作文	総合	総合
III(13:00～14:30)	漢字	漢字	コンピュータ	漢字	漢字
IV(14:45～16:15)		日本事情	個別指導		

週当たりの授業時間は 90 分授業が 17 コマである。このうち漢字クラスについては、平成 14 年度は 90 分授業で行われたが、平成 15 年度からは予算削減のため、90 分のうち前半 45 分のみ授業を行い、後半 45 分は自習とした。

平成 15 年度後期については、受講者のレベルが初級 I（入門～初級終了）、初級 II（初級後半～中級前半）、中級 I（中級前半～中級後半）の 3 レベルに分かれたため、3 つのクラスを開講した。このうち初級 II クラスと中級 I クラスについては研修コースで用意することができないため、留学生センターの「日本語特別コース」と「日韓共同理工系学部留学生プログラム」の授業を利用した。（日本語特別コースでは、通常、週に 4 コマしか行われない初級 II クラスを倍の 8 コマに増加した。）初級 II クラスと中級 I クラスの週間時間割は次のとおりである。

表 4. 初級 II クラス時間割（初級後半～中級前半）

	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)
I (9:00～10:30)	初級 II 総合	初級 II 総合		初級 II 総合	初級 II 総合
II (10:30～12:00)	初級 II 総合	初級 II 総合	読解・作文	初級 II 総合	初級 II 総合
III(13:00～14:30)	漢字	漢字	コンピュータ	漢字	漢字
IV(14:45～16:15)		日本事情		個別指導	

※ で示されたクラスは、日本語特別コースとの共同開催

表 5. 中級 I クラス時間割（中級前半～中級後半）

	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)
I (8:40～10:10)		中級 I 作文			
II (10:30～12:00)	中級 I 漢字	中級 I 読解	中級 I 会話	中級 I 漢字	中級 I 読解
III(13:00～14:30)	初級 II 漢字 個別指導		コンピュータ	中級 I 総合	初級 II 漢字
IV(14:45～16:15)	中級 I 総合	日本事情	中級 I 作文	中級 I 総合	
V(16:30～18:00)	中級 I 総合				

※ は日本語特別コースの授業、 は日韓理工系留学生プログラムの授業

(3) 授業担当者

研修コース全体の授業責任者（コーディネーター）は、留学生センターの専任教員1名が平成14年度から15年度まで継続して務めた。各授業科目の担当は、平成14年度後期はセンター専任教員14コマ（1コマ90分）、非常勤講師4コマである。平成15年度前期と後期はともに、センター専任教員6コマ、非常勤講師10コマとなった。平成15年度から学内の非常勤講師予算として研修コース分が認められたため、非常勤講師のコマ数が増えている。

授業担当は各教員の専門に合わせ割り振られている。日本語教育を専門とする専任教員1名と非常勤講師3名が、日本語授業（「総合クラス」と「読解・作文クラス」）を担当、国際理解教育を専門とする専任教員が「日本事情」、工学部併任のセンター専任教員が「コンピュータ」を担当した。

日本語授業については、ティーム・ティーチングのため、授業の担当者間で毎日、引き継ぎ連絡と打ち合わせをしながら進められた。また研修コースの日本語は基本的に授業を休まない「代講システム」をとっているため、担当者が授業ができない場合には本来の担当者以外の教員も代講で授業を行った。特に平成14年度は日本語授業に非常勤講師予算がつかなかったため専任教員のみの担当となり、出張等での代講が多く、授業開始後2ヶ月以上、本来の担当者で運営できた週が1度もない、代講者の手配もつかないという非常事態となった。平成15年からは非常勤講師の担当が増えたため、このようなことは起きていない。

また平成15年からは、センター専任教員が学期中に特別授業をしたり、集中授業として1週間から10日程度、授業を行なっている。15年前期は「ひらがなWeek」として数名の専任教員が1〜2日ずつ交代で授業をし、15年後期はコーディネーター教員が「スピーチ指導」を1週間ひとりで行った。これらの授業により当該期間中の通常日本語授業は休講となり、その分の非常勤講師手当を学期末の補習授業にまわすことができるため、15週間分の非常勤講師予算で20週程度の授業をすることができる。

3.2 クラスの概要

ここでは研修コースで開講した初級Ⅰクラスの各教科の概要を述べる。

(1) ひらがな

受講生のプレイスメント・テスト修了後、ひらがなクラスが1週間から10日程度行われた。教科書は『一人で学べるひらがなかたかな』（スリーエーネットワーク）で、付属の聴解教材ＣＤを使って授業後の復習が容易にできる。岩手大学では初級教科書に漢字かな混じり表記のものを使っているため、受講者のひらがな読み書きは必須である。したがって1週間以上集中して、ひらがなだけを学習し全員が必ずひらがなを読めるようになること

を目指す。

また、ひらがなクラスは初級クラスと切り離してこれだけを受講することも可能なため、平成15年前期には試験的に「ひらがなWeek」として1週間、岩手大学のすべての外国人を対象としてセンター専任教員による特別授業が行われた。

(2) カタカナ

カタカナクラスは、ひらがなと同じ教科書を使って午後の漢字クラスの時間に、1週間から10日程度開かれている。このクラスでは、ひらがなの定着を妨げないため、読み書きを完全にすることは求めず、自分の国・名前を書ける程度の定着を目指している。カタカナ語を正しく聞き取り書けるようになるための練習（復習）は、総合クラスが後半の初級 II に入ってから毎日行われる。

(3) 総合

「読む・書く・話す・聞く」の四技能を高めるため、語彙・文法・会話・読解・聴解・作文等の活動を行う総合クラスであり、週8コマを約15週継続するため、研修コースのかなめの授業と言える。

教科書は、初級の総合教科書である『みんなの日本語初級Ⅰ、II 本冊（漢字かな混じり版)』（スリーエーネットワーク）を使用した。基本的には媒介語を用いない直接法の授業となるため、学習者はこの教科書に加えて各国語版の翻訳・文法解説書も購入し、毎日予習として文法と単語を覚えた上で、教室活動に望むこととした。

教科書が文型シラバスであるため、コミュニケーション能力を始め、多様な能力を育てるためには工夫がいる。教室活動は、課ごとの文型・単語・会話等について導入－練習の繰り返しが中心となるが、オーディオリンガル法のパターン・プラクティスやロール・プレイ、コミュニカティブ・アプローチのタスク活動などを取り入れ、多様な活動がなされるように注意した。副教材として会話ビデオや、『わくわく文法リスニング99』（凡人社）『楽しく聴こうⅠ、II』（文化外国語専門学校）『にほんごきいてはなして』（ジャパンタイムズ）等の聴解教材も多用している。また、定着のために繰り返しの練習を要する発音指導、カタカナ復習、ディクテーションといった活動も5分程度の時間をとって毎朝行った。

特に教科書が後半の初級 II に入ってからは、専門教育で通用する日本語力とコミュニケーション能力を高めることが必要となるため、会話練習を多くし指導教官との面接を想定した会話テストも行うようにした。

(4) 読解・作文

このクラスでは、総合クラスで使用している『みんなの日本語初級Ⅰ、II 本冊』の復習をしながら、長文読解と作文を行った。1週間に1度、ふだんの総合クラスでは扱うことの

できない分量の日本語を読んだり書いたりすることで、長文の読み書きに慣れ、今後の専門研究に必要な読解力・作文力の基礎を作ることができる。読解の教科書は主に『みんなの日本語初級 I、II 初級で読めるトピック 25』(スリーエーネットワーク)、作文の教科書は『みんなの日本語初級やさしい作文』(スリーエーネットワーク) を使用し、毎週決められた量の長文を読み書きできるようにした。

(5) 漢字

漢字クラスは水曜を除く毎日午後、行われた。教科書は『みんなの日本語初級 I 、II 漢字英語版』(スリーエーネットワーク) で、総合クラスの教科書『みんなの日本語初級 I 、II 本冊』と共に学習可能である。総合クラスでの学習が終わって単語が定着してからその漢字を学べるように、各週の時間割を工夫した。平成 15 年度からは予算削減のため、90 分授業のうち初めの 45 分だけ授業を行い、残る 45 分は自習として書き取りや宿題を行うようにしたが、残って指導を続ける講師も多かったためか、前学期と比べ目立った成績の違いは見られなかった。

(6) コンピュータ

週に 1 回、主に情報処理センターの教育用端末 (Windows を搭載したコンピュータ) を使用してコンピュータ教育を行った。教科書は特に使用していないが、『留学生のための日本語コンピュータ』(富山大学留学生センター) を参考にしている。学習項目は、コンピュータの起動、インターネット接続、メールソフトの使い方、自習用 CD-ROM/Web 教材を用いたカナ・漢字・動詞活用の学習、Microsoft Word を使った日本語漢字かな混じり文の作文などである。自習用の CD-ROM 教材は、『ひらがなかたかな CD - ROM』(新宿日本語学校)、『漢字 100 CD-ROM』(新宿日本語学校)、『KSP まなびや動詞活用編 CD-ROM』(神戸システムプロダクツ) を使用した。これらの学習が終わった後は、日本語修了発表会に向けてプレゼンテーション用ソフト Microsoft PowerPoint でスライドを作る練習を行った。

(7) 日本事情

学習者の日本理解を深めるために、平成１５年度から週に１回程度、日本事情のコマを設けた。授業では、日本文化や日本人の暮らしに関するビデオを見たり、博物館や寺院など歴史的事物の見学、お茶や着物等の体験などを行った。授業は初めのうちは英語で行われるが、学習者の日本語が上達するにしたがって徐々に日本語で行うようにした。ボランティア講師として地域の日本人専門家を迎え、日本語で交流が行われることもあった。

(8) 個別指導

週に数回の個別指導では、主に授業の補習と学習・生活相談が行われた。日本語の授業

は媒介語を用いない直接法で行われるため、一度授業についていけなくなると教室活動が全くわからなくなり非常に深刻である。そのためこのような学習者にとっては、補習授業が欠かせない。補習は授業についていけない学生や個別の問題（発音や記憶など）を抱える学習者に対し定期的に行われ、再試に関連した学習、表記練習、発音矯正などの課題を与えて個別授業が実施された。これ以外の学習者も授業中の疑問点や練習したいことなどがある場合に、適宜、補習を受けている。学習・生活相談に関しては、進路や専門教育、大学院受験に関する問題や、指導教官・友人との関係や日常生活での問題点などの相談があった。

(9) 夏期・冬期休業期間中の補習授業

大学の夏期・冬期休業期間中の補習授業は、平成 15 年度から、通常の 15 週間程度の授業が終わった後に希望者に対して行うようになった。全ての受講生が希望するわけではないが、専門研究や受験準備等で都合がつかない者以外は全員が受講している。授業は大部分を非常勤講師が担当するため、各学期の予算の残余に合わせて授業回数を決定する。平成 15 年度前期は 12 回（4 週間）、後期は 11 回（4 週間）行われた。教科書は受講生のニーズに合わせて選ばれるが、平成 15 年度前期と後期はともに『J. Bridge』（凡人社）が使われている。

3.3 スピーチ指導と修了発表

岩手大学では研修コースの受講生に修了発表を課しており、毎学期、総合クラスの初級教科書修了後に 1 週間程度のスピーチ指導が行われ、その後に修了発表会が開かれている。スピーチ指導は一人当たり 30 分から 1 時間程度の時間をとって毎日行われ、専任教員が指導にあたった。

日本語のまだ不十分な初級終了レベルの学習者がスピーチを行うに際しては、聴衆を飽きさせないための工夫が必要である。岩手大学では「日本語によるプレゼンテーション」の色彩を強くした指導を行い、コンピュータや実物投射機、OHP、CD 等の機器を使った発表を行っている。特に PowerPoint を使ったプレゼンテーションは、専門研究への移行を考えると非常に重要である。

平成 14 年度から 15 年度の修了発表会は、各学期とも学生センター棟 2 階会議室において約 50 名の参加者で行われた。参加者は主に、日本人学生、留学生、教員、留学生支援団体の方々である。発表の内容は、自国の文化や自然の紹介が最も多く 14 件、日本に関するものが 2 件、自国と日本との比較が 1 件である。あまり高度な日本語力がなくても聴衆にアピールしやすいという点で、写真を多く見せられる文化・自然紹介が題目として選ばれる傾向がある。発表題目の一覧を表 6 に示す。

表 6. 研修コース修了発表会 題目一覧

平成 14 年度後期	平成 15 年度前期	平成 15 年度後期
エベレストとルンビニ	ブラジルの音楽	メキシコについて
中国の年中行事について	ミャンマーの寺	ベトナムの有名な物
サバイバル盛岡	私と日本	インカの町“クスコ”
インドネシアについて	美しい島々ーフィリピン	挨拶ーインドネシアと日本の比較
仏教と寺の国ミャンマー	ザンビアのサファリ	
フィリピンー東洋の真珠ー		
マダガスカル		
万里の長城		

3.4 評価

研修コースの修了要件は、(i)授業の出席率が 75%以上 (ii)テストの平均点が 60 点以上 (iii)毎日の授業に積極的に参加・貢献すること、の 3 点であり、この要件を満たした者には学期末の修了式において修了書が授与される。修了発表会での発表と休業期間中の補習授業への出席は、大学院受験生の都合があるのでこの修了要件からは外している。テストは、日本語の授業に対して中間テストが 4～5 回、修了テストが 1 回行われ、60 点以下の者には再試が課される。平成 14～15 年度のすべての修了生がこの条件を満たし修了書を受け取っている。成績については、研修コースは単位を出すものではないため原則として公表しておらず、受講生にも通知していない。

研修コースでは、学期末の学生による授業評価（エバリュエーション）は行っていない。これは翻訳にかかる予算を考えてのことであるが、教員評価のため今後は必要である。ただしこれに代えて、コーディネーター教員が学期中に数回の「インタビュー」を行い、授業・生活全般に関わる数十の質問に答えてもらい受講者の要望を聞くことにより、問題点を把握し改善するようにした。この方法は、コース運営の改善という点に限って言えば、コース期間中に問題点を解決できるという点で、学期末 1 回の授業評価よりは受講者にとって利点が多い。

4. 学習・生活支援

4.1 学習支援

研修コースでは日本語・日本文化学習を助けるため、受講生に図書、カセットレコーダー、電子辞書、テープ・CD・コンピュータ教材の貸し出しを行っている。また留学生センター談話室には 5 台のインターネット接続された Windows コンピュータがあり、事務局が開いている間はいつでも使うことができる。このコンピュータを含め、岩手大学の情報処

理センター、中央図書館マルチメディア情報閲覧室、学生センター棟就職情報室の教育用端末は全て多言語対応の設定がされており、日本語・英語・中国語・ハングル・ロシア語・タイ語・ベトナム語・アラビア語・ドイツ語・フランス語・ヒンディー語の 11 言語が使用可能である。ただし DVD 教材が使えるコンピュータはまだない。また留学生用図書に関しては、中央図書館に国際交流図書書架が配置され、日本語教材や辞書等を借りることができる。また受講者が日本語の学習や進路について相談したい場合には、各専任教官がオフィスアワー等で対応している。

4.2 生活支援

研修コース受講生は、ほとんどが岩手大学の留学生寮である国際交流会館に入居する。この寮には日本人の管理人がおり留学生の様々な問題に対応している。また研修コース受講生には各人に日本人学生チューターがついて、各学期 40～50 時間程度のサポートを行い日本での生活・学習を手助けする。地域の国際交流団体も生活支援を行っており、留学生が参加できる交流会やホーム・ステイプログラムも多くある（資料編の「地域との国際交流」を参照)。

5. まとめに代えて：研修コースの今後

以上が岩手大学留学生センターにおける日本語研修コースの概要である。限られた予算・人的資源の中でコース運営を行ってきたのだが、今後も日本語教材の充実、教員・授業の質の向上を図る具体策を考えていくつもりである。

国立大学独立法人化後の留学生に対する予算措置は、岩手大学においても厳しいものがある。研修コース担当者には、予算削減という名のもとに留学生の学習と生活が脅かされることのないよう、留学生にとって最低限必要な教育・生活支援はきちんと行っていくという姿勢が必要である。

研修コースを終えた教員研修留学生が小・中学校での実習をこなし、大学院研究生が無事に修士・博士課程の入試に合格し研究を続ける、そのための日本語教育はどうあるべきかを真摯に考えていかなければならない。

岩手大学における理工系留学生指導について
平成14－15年度

小笠原　洋光（岩手大学国際交流センター）

ここで述べる理工系留学生は、主として工学部における学部学生、大学院生、大学院受験予定者を対象としている。指導内容については、授業と課外に分けて述べる。

1．学部生指導

1.1　授業

留学生のために工学部における学部内共通基礎科目として「基礎工学概論」をおき、工学の基礎となる物理学、数学、化学に関する日本語で書かれている文章と、日本の工業事情をビデオで紹介し、日本語の読解力と聴解力を養成すること、日本語で書かれた半導体基礎用語、日本工業規格についての用語を学ぶこと、日本語による報告書（レポート）の書き方を習得することを目的とする。

1.2　授業内容と教材

ここで用いた資料と授業内容を以下に記す。

(1)　George L. Trigg 著書『Crucial Experiments in Mordern Physics』の中から、[光の粒子性]、[量子概念の起源] の２題を、英文とその日本語対訳を用いた読解、聴解。

(2)　『 Encyclopedia AMERICANA』（International EDITION)より、[半導体とトランジスタ]、[エネルギー源]、[熱機関と作業循環行程]に関する３記事についての英文とその日本語対訳を用いた読解、聴解。

(3)　砂川重信著書『力学の考え方』（岩波）及び Isaac Newton 著書『PRINCIPIA』（ Motte's English Translation）より、力、運動量、エネルギーの概念をニュートンの運動の法則（Newton's laws of motion ）をもとに理解。

(4)　砂川重信著書『電磁気学の考え方』（岩波）より、　電磁気学の基本概念である電磁場を近接作用の立場から理解する。

(5)　日本規格協会編集　JIS ハンドブック『品質管理』より、　計測用語を中心にして、測定及び測定誤差についての理解。

(6)　E.インゲルスタム、S.ショーベリー、木下是雄共著『応用物理ポケットブック』より、国際単位系、物理基礎定数、エネルギー量子に関する換算図表の理解。

(7)　小笠原洋光、平塚貞人、山口勉功、中西良樹共著『物理学実験』より、

自然科学における法則の認識論的意味と実験・観察の役割、及び科学の方法論の工学にもたらす意義の解説と理解。その他の資料は参考文献Ⅰ参照。

1.3 開講時期、受講者、及び授業の進め方

この授業は、毎年前期に開講され、受講者は、平成14年度は1年次生5名（電気電子工学科1名、応用化学科2名、機械工学科1名、建設環境工学科1名）で、15年度は3年次生4名（電気電子工学科3名、建設環境工学科1名）となっている。

授業内容・教材は、受講者個々人の日本語能力、即ち漢字の読み、長文理解力と理科と数学の基礎学力(日本の高等学校での学習領域)についての力量を見ながら選択設定した。

1.4 平成14年度生について

平成14年度は、対象学生が1年次であったことから、大学入試レベルの知識と語彙の習得を目途に、読み・書きを中心に大まかな内容把握が出来るように教材を随時変更して行った。従って、講義要綱に沿った予定の内容と時間配分は遂行できなかった。

以下に本年度の授業内容を列記する。(x)は1.2で述べた参考資料番号である。

①工学基礎としての物理学(7)、②力学;力と運動、ニュートンの運動の法則(プリンキピア)、運動方程式（3)、③英—日対訳；半導体とトランジスタ、エネルギー源、熱機関と作業循環行程(熱力学)(2)、④電磁気学の考え方(マックスウエルの方程式とオームの法則、ガウスの法則と静電場）(4)、⑤英—日対訳；光の粒子性（フォトンという概念）(1)、⑥JIS品質管理；計測用語の解説(5)。

学習を進めるにあたっての問題点は、最近の大方の日本人学生もそうであるが、書き取りの時間的な間合いを取りながら板書してそれの説明をおこなうがノートせず、また何か問題を出して答えを求めるとき、「さあ、ノートに書いて考えて御覧なさい」と促されなければ決してノートに書いて考えるということをしないことである。これでは復習が成り立たないのは当然で、学習効果が上がらない。文章を書くことは思考力を高めるために有効な手段であるから、今後はレポート作成の時間配分を大きくとる必要があると考えている。

1.5 平成15年度生について

平成15年度の受講は3年次学生、3名が電気・電子工学科生ということで、電磁気学の理解を主体に輪読の形で、時折ベクトル解析の初歩を講義しながら授業を進め、マックスウエル方程式を扱った。

本年度の授業内容を列記すると、①物理学と工業；実験及び数量的に把握することの意味（予測と設計、製作と動作解析）(7)、②電磁気学の考え（遠隔作用と近接作用、静電場と自己力、ガウスの法則の微分形と積分形、静電ポテンシャルと回転rot、波動方程式・・・弦、気柱、棒の振動、マックスウエル方程式と電磁波）(4)、③科学論(文献Ⅰ)

このクラスは3年次という事と中国本土からの留学生3名とマレーシアからの学生1名で、いずれも専門書を読んで行くための漢字の識字力も充分有し、文章表現もほぼ満足できた。また、物理学の内容についての理解も一定程度の進展がみられたが、前年と同様にノートを取るという姿勢は乏しかった。

1.6　指導方法の問題と改善策について

工学部留学生への対応は、物理学実験指導で 1960 年代半ばから継続して行ってきているが、この数年間、少なくとも日本語でレポートを書く力はかなり低下してきているように思われる。しかし、個人差が大きく、一概に論ずることは難しい。

実験レポートを書くという学生自身の具体的な作業を通じての表現文を一文づつ個別に指導することで、かなりの改善を促すことは可能であるとの感触は得ている。

今後の指導の主要な課題は、上述のように、具体的な実験や観察を通じての「日本語でレポートを書く」ことにあり、これを実現するための教材研究*) が求められる。

＊）例えば、道脇綾子　[本センターにおける学部留学生の物理教育について]
(東京外国語大学留学生日本語教育センター報告（2003. 3. 14)
シンポジューム「留学一年目の教育のあり方 ― 科学教育の視点から ― 」)
に見られる「教材と実験を一体化した留学生教育」のような取り組みがあるが、このような観点からの授業を行っていくためには、実験室、実験資材などの施設・設備の問題がある。これを学部の施設・設備を利用するにしても、人員配置や正規の授業とどのように折り合いをつけていくかなど、我々の大学で実現していくためには乗り越えなければならない問題は多いが、このような視点からの新しい試みがこれからの留学生指導に求められている一つの姿ではないだろうか。

2．大学院生指導

この期間において、受講希望者は無い。

3．大学院入学前予備教育

3.1　受講者と指導内容

受講申し出のあったのは、平成 15 年度前期 1 名であった。磁性関係の研究を目的としているということで、主に磁性に関するテクニカル・タームを、日本語とその英語表記の用語集を作成して行った。それに加えて、磁性物質研究についての英語論文の翻訳と、その内容の解説をおこなった。

3.2　参考資料について

磁性関係の用語及び論文を読むにあたって利用した資料は、固体物理学及び磁性体の物

理学の専門書である（参考文献Ⅱ）。

4．日韓理工系交換留学生指導

4.1　対象学生

平成15年度は、工学部機械工学科へ日韓理工系交換留学生1名が16年4月入学の予定で、15年10月より予備教育に来日してきた。

4.2　指導内容

この過程における教育内容は、学部入学前の学部基礎教育への準備とするもので、日本における高等学校終了程度の物理と数学の内容理解のための日本語教育である。

主として読解、特に漢字習得を目途に置いて、岩手県内で用いられている標準的な物理ⅡBの教科書をテキストとして指導した。

取り上げた内容は、

(1)　運動学；空間と時間、ベクトルの概念、速度、加速度、重力加速度と地上での物体の運動、等加速度運動における運動状態を表す諸量（速度、加速度、時刻、位置等）の間の関係式

(2)　力学；力の概念、質量と重量、弾性力、力学平衡、抗力の概念、ニュートンの運動の法則、運動方程式

(3)　熱と分子運動；熱力学の基本原理としての熱平衡と温度の概念、熱の作用と状態変化、状態方程式

最初の進度は、一時間の授業で1～2ページ程度であったが、物理的な内容が簡単なこともあり、また、実験・観察に関する記載内容も豊富であったことから概念習得が比較的に容易であったとみられ、半年後は　5～6　ページ／時間　の読解が可能となり、かなりの進展が見られた。

物理の教科書というように、特定の分野に限定された文章の学習では使用されている用語の再出頻度が高いので、漢字は勿論言い回しなどの習得も容易になる。今後のあり方の参考になろう。

授業期間は、平成15年10月16日～平成16年2月12日（計13回、19.5時間）。

5．課外指導

平成14年度において、学業不振のために4年次の卒業研究に至らなかった留学生は最終的に2名であった。個別対応するための呼出に応じた学生は1名で、所属学科の指導担当教官との連絡を緊密に行う事で、平成16年4月から4年次の正規のカリキュラムを受けるに至った。

この2名の学生が学業不振の原因は、日本語の能力が低いため、専門教科において基礎

学力不足と判定・評価されたことであるが、個別の面談と指導及び学業（物理学実験の指導）成績の状況から判断するならば、日本語の能力ではなく本人の勉学への取り組みに意欲が見られないことが最大の問題であると見受けられた。

呼出に応じた１名について、入学して初年度の出席状況は普通であったが、２－３年次の出席状況が悪く、この期間に日本語の読み書き能力の低下があったように見受けられ、本人もそのことを認めていたので専門の教科書の読解指導を数回行った。また、カリキュラムの組み方の相談にも応じ、ある程度の進展がみられ、上述のように 16 年度の 4 年次進級が認められるに至った。他の１名は呼出にも応じないため、詳細は不明である。

参考文献 I

辞　典：理化学辞典（岩波書店）、物理学辞典（培風館）、科学大辞典（丸善）、理科年表（丸善）、応用物理実験ハンドブック（オーム社）、半導体用語辞典（工学図書）、絵でわかる半導体と IC(日本実業出版社)、機械を説明する英語（工業調査会）、数学ハンドブック（朝倉書店）、学術用語集物理学編（文部省）、科学技術論文、報告書その他の文書に必要な英語文型・文例辞典（小倉書店）、

単行本：霜田光一、桜井捷海 共著 『エレクトロニクスの基礎』(物理学選書 1)、『応用エレクトロニクス』(物理学選書 17)（裳華房）、
アインシュタイン＆インフェルト共著『物理学は如何に創られたか』(岩波書店)
朝永振一郎著『物理学とはなんだろうか』(岩波書店)

参考文献 II

単行本：C.Kittel, Introduction to Solid State Physics.(WILEY —MARUZEN)
F.Seitz, The Modern Theory of Solids.(McGRAW-HILL —KOGAKUSHA)
近角聰信著『強磁性体の物理』上、下（裳華房）
近角他、共著『物質の磁気的性質』(朝倉書店)
安達健五著『化合物磁性』局在スピン系及び遍歴電子系（裳華房）

論　文：M.R.Govindaraju, et al.,
Nondestructive evaluation of creep damage in power-plant stream generators and piping by magnetic measurements.
NDT & E International, vol. 30, No.1, pp. 11-17, 1997.

留学生と地域交流

岡崎正道（岩手大学国際交流センター）

留学生センター設立以前から、岩手大学の留学生たちは地域のさまざまな交流活動に積極的に関わってきた。県や市の国際交流協会が主催する各種行事、県内の小中学校等に招かれて生徒たちと交わる交流会、諸団体が計画して実施する各種イベントへの参加、その他数え上げればきりがないくらいである。

それらの中から、特にユニークと思われる活動の内容を、関係する団体の紹介も交えながら述べてみたい。

１．地球市民の会

１９９５年に結成された「地球市民の会」は、盛岡市内に在住の留学生を中心とする市民レベルでの “ふだん着の交流”、「岩手を第二の故郷にしてもらえるようにしたい」という願いをこめた活動を、様々な形で行なっている。

恒例の行事としては、１月に市内のお寺で「新春餅つき大会」、４月に市内の桜の名所である高松の池で「花見」（これは近くの寺院や神社の見学を含めたハイキングとセットで行なう）、夏か秋にはキャンプかもしくは盛岡周辺遊覧のバスツアー（自然鑑賞や名所旧跡の探訪）を実施。また不定期の催しとしては、不用品バザーなども行なっている。

これらの行事に参加することにより、留学生は日本の文化や伝統にふれるとともに、日頃なかなか接する機会のない大学外の人々との出会いを経験することができる。

２．日本語交流室「じょい」

１９９８年に発足したこのボランティア団体は、「外国から来た人たちのために言葉や生活を支援する」（大畑佳代子代表）目的として、岩手大学の近くの公民館で、約４０人のスタッフが百人近い外国人（留学生だけでなく、その家族や盛岡在住の外国人）を対象に、毎週定例の日本語講座を開いている。スタッフは市内の主婦が中心だが、各自役割を分担し、行事の企画や会報の発行なども行なう。「教えるためには、自分たちも正しい日本語を知らなければ」と勉強会も行なっている。

毎年１２月、生徒や家族など約二百人が参加して賑やかに音楽や劇を披露する「じょいフェスティバル」は、年末の恒例行事となった。大畑代表は「盛岡でこれほど大勢の外国人が一堂に会する機会は、ほかにないのでは」と言う。

岩手大学の留学生及びその家族がこの団体から受けた恩恵は、実に計り知れないものがある。

３．留学生支援団体ＡＶＩＳ（アヴィー）

２００３年秋、新たな団体として旗揚げ。「岩手大学と留学生間の相談窓口と情報提供」を目的に掲げ、月例のティーサロンやホームビジット、歓迎パーティ、餅つきや百人一首、ひな祭りなどの伝統行事、祭りの見学等々、多彩な活動を展開している。

４．小中学校での交流会

小中学校の時間割の中に「総合学習」の時間が設けられるなど、教育の改革が進められるのに伴い、国際交流・国際理解教育と銘うった様々な取り組みが学校現場で模索されているが、この方面において外国人留学生が協力できることは少なくない。盛岡市内はもとより、近隣の市町村からも、「学校の行事に留学生の参加をお願いしたい」という要請は、年をおうごとに多くなってきている。

そうした要請を受けて、これまでに岩手大学の留学生が赴いた学校は数多くあるが、中でも注目すべきは、盛岡市立北松園中学校との交流である。

１９９６年に新設校として誕生したこの中学校は、開校直後から、生徒・父母・教師の三者の連携・協議によって学校のシステム作りや運営を図るという、全国的にも珍しい方式を模索、様々な波乱を経つつもその実践に努めてきた。「生徒の個性と創造性を最大限尊重する」という基本方針のもと、校則を一切定めないなどのユニークな試みが注目を集め、マスコミを通じて全国に紹介された。

この中学校で開校初年度から、岩手大学の留学生を招いての交流会が定期的に開催され、新聞やテレビでも報道されている。参加留学生の数は最初は１０人程度だったが、年々増加し、２００３年度は５５人という多人数が同校を訪れた。岩手大学の全留学生の、実に３分の２が参加したわけである。

交流会は１日だけの単発行事ではあるが、学習・遊び・討論・スポーツ・異文化紹介等が組み合わさった、かなり充実した内容となっている。感化・啓発を受ける生徒も、決して少なくないと思われる。

北松園中学校ほどではないが、他の中学校や小学校でも留学生を招いてのイベントを、いろいろ工夫を凝らしながら実施している。毎年５～１０校からの要請があり、今後ますます増えていくことが予想される。

５．岩手県立杜陵高等学校の特別講座

杜陵高校はかつては勤労学生が学ぶ定時制の学校だったが、現在は全日制普通科の高等学校となっている。それでも「単位制」という大学に類似したシステムをとり、中学時代に不登校を経験した生徒や他の高校を中途退学した生徒を大勢受け入れるなど、特色ある教育を実践している。

この杜陵高校で１９９３年度から、岩手大学の留学生や海外経験の豊富な日本人を講師として招請し授業を担当させる、「外国事情」「国際奉仕基礎」という特別講座が開講され

ている。岩手大学の留学生は、毎年４～６人出講している。彼らは１人が週１コマずつ８～１０コマを受け持ち、２０～４０人の生徒を相手の授業を行なう。その内容は講義形式ばかりでなく、生徒と教師が一緒に作業をしたり、民族音楽の鑑賞や外国料理の教室といった特色のあるものとなっている。

これは単発的に行なわれる学校行事ではなく、教育委員会の認証も得て実施される、あくまで正規の科目である。全国的にもあまり例がないと思われるこの教育実践は、スタート当初新聞等で広く全国に紹介され、１９９６年には国際教育交流馬場財団の第７回馬場賞を受賞した。

６．その他の地域交流

これらのほかにも岩手には様々な交流団体が存在し、特色ある活動を繰り広げている。留学生もそれらの諸活動に参加することによって、自らの見聞を広め、かつ地域の国際交流に貢献している。

パイロットクラブという国際女性団体の主催する、脳障害者支援のための「パイロットウォーク」が全世界一斉に行なわれたことがあったが、岩手大学からも３年連続で留学生数名がこれに参加した。

これまた国際女性団体である国際ソロプチミスト盛岡が岩手県内の高校生を集めて行なう、「ユース・フォーラム」という討論会に、２００３年岩手大学の留学生も初めて加わり、「あなたにとって一番大切なことは何ですか？」というテーマで、活発なディスカッションを交わした。

２００３年より始まったＪＡＢＡＳ－実学の森、いわて発世界の結いづくり事業－は、西沢潤一岩手県立大学長・張富士夫トヨタ自動車社長・増田寛也岩手県知事・片山善博鳥取県知事など、著名人が多数出席した大がかりな行事であったが、岩手大学の留学生も約２０名が参加、大変意義深い交流を体験した。

２００３年５月、中国の新疆・ウイグル地方出身の留学生が中心となって、「シルクロード音楽会」を開催した。同年２月のウイグル大地震の被災者支援チャリティも兼ねたこの企画は、市民・学生など多数の参加で大成功を収めた。

これ以外にも留学生と地域の交流の実践例は、数え切れないほどたくさんある。留学生と日本人市民が、民族・国籍・言語・宗教・文化などの差異を超えた「地球市民」としての一体感を抱いて交流を積み重ねていくならば、たとえその一つ一つは微小な試みであっても、やがてはきっと大輪の花となっていくに違いない。その可能性を信じながら、これからも様々な取り組みを続けていきたいと思う。

国際理解教育による地域貢献の試み

尾中夏美（岩手大学国際交流センター）

1. はじめに

2002年度より総合的な学習が小、中学校で本格的に実施されることになった。福祉、環境、地域活動などと共に国際理解が選択肢の中に入った。しかし、何をすれば「国際理解が深まった」ことになるのか。画一化を避けるためマニュアルになるものは明示されない。先進例などを参考にしながら現場教師は文字通り手探り状態でのスタートを切った。

ちょうど小学校での英語活動が盛んになりつつある時期でもあったため、国際理解教育を英会話教育に振り替えてしまう学校もあった。また、国際交流は英語で行うものだという固定観念や、教員自身が欧米系の外国人との交流を好む欧米偏重傾向も見られた。しかし、実際に身の回りで触れ合う外国人にはアジア系が多く、英会話だけに突っ走ることが事実上難しかったことが功を奏して多様な文化に目を向けられるようになった。地域の国際交流協会や市民団体がさまざまな事業を企画して県民の国際理解を深めるのに大きな役割を果たしていると言えよう。

このような背景で、岩手大学にはまとまった数の留学生がいるということから地域の国際交流協会や市民団体、学校などから留学生個人や、大学に対して事業への協力依頼が入ってくるようになった。

2. 岩手大学が提供する人材の特徴

地域社会に異文化の人材を提供する岩手大学の留学生の特徴についてここで述べてみたい。

2.1 豊富なリソース

岩手県内には日本人と結婚した外国出身者や教員などが在住しているが、個人的な知り合いでないかぎり、その居住先をすべて把握するのは困難である。また英語指導助手は英語圏に限られていて代表する国に偏りがある。一方、岩手大学には28カ国から来日した豊富な人材が一箇所にまとまって所属している。そのほとんどがアジア圏からの留学生であり、ほかに南米やアフリカなど日ごろなじみの薄い国々出身者も若干名いる。英語圏からの留学生はほとんどいない。

2.2　日本語での交流が可能

岩手大学のほとんどの留学生は程度の差はあるものの基本的に日本語での意思疎通が可能である。「国際交流は英語ができることが前提」というこれまでの一般的な理解から、交流をより身近な存在にしたという点でこれは大変重要な要素といえよう。国際交流活動の裾野が広がりごく一部の「国際派」の人々だけのものから普通の人の日常的な活動の一部にする上で重要な要件である。

2.3　依頼相手の要望にあった留学生の派遣

岩手大学では留学生センターが留学生の在籍管理や日本語、日本文化理解関連の指導をする関係上、個別の留学生との接点がもっとも多い。さまざまな接触の機会から個人としての特技や関心事などに関する情報を入手できる。そのような情報は留学生の派遣依頼があったときに依頼相手の要望にあった留学生を派遣するのに役立つ。「料理を教えてほしい」「遊びを紹介してほしい」「民族衣装について学びたい」など多様な要望が出されるが、そういった要望に的確に応えられる留学生を派遣することが可能なのである。

2.4　留学生の家族の存在

英語指導助手や国際交流員などは独身者に限られており、任期も最長3年である。岩手大学の留学生は1年以内の短期学生から、学部、大学院と5年以上の長い留学期間を過ごす留学生もおり、大学院生の場合家族同伴者が何組もいる。そのような場合家族も異文化理解交流に一役買ってくれる。たとえば、バングラデシュ出身の留学生の夫人はサリーの着付けを教え、中国ウィグル自治区出身の留学生の夫人は民族衣装を着て民族の踊りを披露したという事例がある。

3. 岩手大学が支援した学校での国際理解教育プログラム－盛岡市立東松園小学校の例から－

岩手大学からの小、中、高校対象の留学生派遣は年々数が増加している。2002年度には小学校12件、中学校1件そして高校1件、2003年度は小学校21件、中学校1件、高校2件であるが、これに留学生が個人的に依頼を受けたもの、教育研究などの関係で実施したものを含めるとさらに増える。それらの多くは1回限りの依頼であり、事前打ち合わせを含めて本学教員が派遣をコーディネートしている。また、盛岡市近郊の小学校に関しては、小学校の国際理解教育を支援する市民団体

が、独自で綿密な事前打ち合わせの後に本学留学生とともに小学校を訪問し、経験の少ない学校に対してプログラム全体の組み立てにいたるまで支援している。経験を積んだ学校でさらに国際交流教育を推進したい学校は自力でのプログラム企画を試みる。ここでは、そんな小学校の一例として、盛岡市立東松園小学校の学校としての取り組みについて紹介する。

3.1 経緯

東松園小学校は数回、国際理解教育を支援する市民団体の協力を得ながら国際理解教室を総合的な学習授業の一環として企画、実施した。平成 13・14 年度に岩手県教育委員会より国際理解教育の指定校、平成 14 年度には盛岡市教育委員会による国際理解教育の指定校となって、独自企画を開始することになった。支援の要請を受けて筆者がプログラムの企画と留学生との打ち合わせ、派遣にかかわった。

留学生を交えた授業を企画する上で、子供の目線での国際理解や国際的な視野を教科にも取り入れた取り組みに留意してきた。従って、派遣の前に必ず担当教諭と留学生との打ち合わせを十分に行い、筆者はその場に同席して適宜助言した。

3.2 文化理解から教科教育へ

2002 年度には東松園小学校は国際理解教育（英会話等）のテーマで学校公開授業を実施することが決まったので、その授業におけるゲスト・ティーチャー（学校ではそのように呼ばれていた）を務めることになった岩手大学の一人の留学生がその準備も含めて 3 度訪問した。対象学年が小学校 3 年生ということもあり、1 回目、2 回目はバングラデシュの文化について学んだ後に、公開授業の 3 回目は社会科で昔の遊びを学習していることからテーマは「遊び」ということになった。バングラデシュの遊び「カナマチ・ボー・ボー」を教えてもらい、日本の「福笑い」と「だるまさんがころんだ」を留学生に説明して一緒に楽しむという、教科と連動した内容の授業であった。

2003 年度は同校に国際交流授業で 10 回留学生を派遣している。5 年生は社会科で稲作を学んでいたことから、稲作について詳しいアジアの留学生を派遣してほしいという依頼を受けた。岩手大学には農学部があり、博士課程で米をテーマとした研究を行っているベトナム出身の留学生がいたので彼が同校を 3 度訪問し、ベトナムでの稲作や米の品種についての説明を行い、試食をさせ、生徒たちの調べ学習についてのコメントを述べた。これらは文化の断片的情報提供にとどまらず、個々の教科の教育内容にしっかりと組み込まれている。これまで、日常生活を中心とした

異文化を理解することが国際交流授業のメインテーマだったので、これは新しい展開となったと言えよう。

3.3 留学生による英語活動の支援

一般的に英会話を指導しようとする場合、とかくネイティブスピーカーにこだわったり、英語の地域的ななまりの有無にこだわったりする傾向が強い。しかし、実際に英語が使われる場面では多くの場合英語を母国語としない人同士の意思疎通の手段として使われている。英語が国際語と呼ばれている由縁である。

東松園小学校では 2003 年度にインドネシア、ミャンマー、フィリピン出身のアジアの留学生を英語活動の講師として招き、簡単な調理を、英語を使って指導した。派遣依頼を受けた時、派遣する留学生の英語の能力が高いことと、発音が聞き取りやすいことには留意した。しかしこの英語活動の意義は、どれだけネイティブスピーカーに近い発音ができるかよりも、英語の多様性と世界各国で英語が意思疎通のために使用されているという国際語としての英語を生徒たちが身をもって直接経験できたことにあるだろう。

4. 学校外プログラム

学校で実施されるプログラム以外にも、公民館などで開催される国際交流事業にも多くの留学生が参加し、写真やさまざまな生活用品、民芸品などを見せながら文化紹介をしたり、簡単な挨拶やゲームを通して親しみがもてるように工夫を凝らした内容を企画したりしている。また県内の国際交流協会などで実施される大人対象の国際理解講座などの講師としてもレギュラー参加している留学生もいる。

料理は国際理解活動の中でもっとも人気があり、誰でも参加しやすい活動である。中国の餃子作りをはじめ、学校や地域活動の一環として留学生が料理交流の講師を務めている。児童対象の料理交流プログラムを市民団体が企画し、2003 年夏にマレーシアの留学生 2 名とミャンマーの留学生 1 名が小学生 20 名を対象にそれぞれの国のお菓子作りを指導した。

5. 地域貢献の効果

本稿に述べたような活動を通して、年間のべ 1000 人以上の児童生徒と大人が本学の留学生を通して異文化と触れ合っていることになる。このような異文化との出会いのあった子供たちは、家庭でも感動や驚き、発見などを家族と共有することが推測されるので、波及効果も含めるとさらに多くの人々が直接、間接的に国際理解

を深めたことになる。

年に一度定期的に開催されているひとつの中学校での留学生交流事業では、異文化理解にとどまらず人生観を語り合うという内容の交流が行われた。「今が楽しければいい」といった意見が目立つ中学生に対して「自分の子供たちの将来のために頑張るというのもいいのではないか」と熱く語る留学生たちの言葉は、中学生たちの心にどんなふうに響いただろうか。日本にいるだけではなかなか理解できない日本社会の豊かさの落とし穴を感じる瞬間だったのではないかと思う。

このように多様な地域貢献を継続することによって少しずつ世界的視野で物事を考える人が増えることと、異文化や異なる価値観を持つ人々への偏見が無くなっていくことが期待される。

6. 今後の課題

留学生の派遣依頼が今後ますます増加することが見込まれるが、単なる機械的な「留学生派遣窓口」とならないために、積極的に教育的な働きかけを行っていきたいと考えている。以下にその主な項目を列記する。

6.1 留学生派遣のガイドラインの策定

留学生の派遣を依頼する依頼主が必ずしも活動目的や手法についてしっかりと計画を立てているとは限らない。「国際理解教育は留学生をゲストにしてまかせてしまえばなんとか格好がつく」という丸投げの姿勢が伺える場合が少なくない。「今週の金曜日に 10 人の留学生をお願いします」といった出前注文的な依頼を受けることがあるが、こういった依頼はその典型と言えよう。このような事業では派遣された留学生にも不満が残る残念な結果を招くことになる。良いプログラムを作るにはそれなりの準備期間と事前打ち合わせが必要である。また、依頼を受けた学校が徒歩や自転車で行ける距離でない場合には、留学生への交通費や若干の謝金の支給が望ましい場合があるが、これまではこういった面であまり積極的な対応を行ってきたとは言えない。そこで、今後は留学生派遣のガイドラインを策定し、その中で留学生派遣を依頼する側に対して全体の企画をしっかりとたて、時間配分やどのような成果をめざすのかなどを意識的に行うよう教育的指導を行っていきたい。

6.2 一過性イベントからの脱却

国際交流授業をほかの授業とは脈絡のない「イベント」としてしか捕らえていない傾向がある。前述の小学校の例にあるように、授業の流れの中に組み込まれてこ

そ教育としての価値が最大限に生かされる。国際理解教育の授業が単なる一過性イベント化しないように、さまざまな助言を行っていく必要がある。

7. さいごに

総合的な学習の一環として国際理解教育を実施するのは時代の趨勢となっている。しかし、その組み立てはまだ確立されておらず、試行錯誤しているのが現状である。今後ホームページなどで留学生派遣を依頼する学校や団体に向けての企画全般に関する助言を提示し、綿密な事前打ち合わせができる態勢を作っていきたいと思う。

昨今外国人による犯罪増加が懸念され、あたかも事実を裏付けるようなマスコミ報道が増えている。そのような報道により外国人全般に対する偏見が助長されてはならない。また、最近のギクシャクした国際情勢を見るにつけ、個人個人がグローバルな視点で国家間のやりとりを理解しようとする姿勢がよりいっそう求められるだろう。岩手県民がこういった公正でグローバルな視点を持つ基礎に、岩手大学の留学生センターは重要な役割を担ってきたと言えよう。

日本語特別コース

1．日本語特別コースの目的

外国人留学生、外国人研究員とその家族が、円滑な日常生活および研究生活を送るための日本語習得支援を行う目的で、日本語特別コースを実施する。

2．実施状況

①平成 14 年度後期

クラス	時間	担当
初級Ⅰ総合	月 9・10　水 9・10	尾中夏美
初級Ⅱ総合	水 3.4　　金 7.8	松林和美
中級Ⅰ読解	月　7・8	大畑佳代子
中級Ⅰ会話	金　5・6	大畑佳代子
中級Ⅱ読解	火　3・4	大高久枝
中級Ⅱ会話	月　9・10	松岡洋子
中上級文法	火　5・6	松岡洋子

②平成 15 年度前期

クラス	時間	担当
初級Ⅰ総合	集中講義（5 月～7 月）	松岡洋子 大畑佳代子
初級Ⅱ総合	火 5-8　　木 5-8	山屋頼子
初級Ⅱ漢字	月 5・6	小笠洋光
中級Ⅰ総合	月 9・10 木 3・4	尾中夏美 松岡洋子
中級Ⅰ会話	水　5・6	尾中夏美
中級Ⅰ読解	月　3・4	岡崎正道
中級Ⅰ作文	水　7・8	岡崎正道
中級Ⅱ総合	月　7・8 水　5・6	岡崎正道 松岡洋子
中級Ⅱ読解	水　7・8	橋本　学
中級Ⅱ作文	木　5・6	中村ちどり
理系日本語	木　7－10	小笠原洋光
上級Ａ会話	月　7・8	松岡洋子
上級Ｂ読解	水　9・10	岡崎正道
上級Ｃ作文	金　3・4	菊地　悟

③平成 15 年度後期

クラス	時間	担当
初級Ⅰサバイバル	火 1－4 水 1－4 木 1－4	坂本淳子 小野寺淑 大畑佳代子
初級Ⅱ総合	火　1－4 木　1－4 金　1－4	小野寺淑 小野寺淑 大畑佳代子
初級Ⅱ漢字	月　5 金　5	小笠洋光
中級Ⅰ総合	月　7－10 木　5－8	尾中夏美 松岡洋子
中級Ⅰ会話	水　3・4	尾中夏美
中級Ⅰ読解	月　3・4	岡崎正道
中級Ⅰ作文	水　7・8	岡崎正道
中級Ⅰ漢字	月　3 木　3	尾中夏美
中級Ⅱ総合	月　5・6 水　5・6	松岡洋子
中級Ⅱ読解	水　7・8	橋本　学
中級Ⅱ作文	木　5・6	中村ちどり
理系日本語	木　7－10	小笠原洋光
中上級文法	木　3・4	菊田紀郎
上級Ｄ会話	月　7・8	松岡洋子
上級Ｅ読解	水　9・10	岡崎正道
上級Ｆ作文	金　3・4	大野眞男

＊　中級Ⅱ読解、中上級文法は人文社会科学部教員、上級作文は教育学部教員が担当
＊　上級会話、読解、作文は全学共通教育外国語科目と同時開講

（文責：松岡洋子）

日本語研修コース

1. コースの目的

日本語研修コースは、大学院入学前の日本語予備教育プログラムであり、1学期間の日本語集中コースとして開講されている。受講対象となる学生は、岩手大学と近隣の大学の大学院へ進学する予定の留学生（大使館推薦の国費研究留学生および教員研修留学生）であるが、センターの許可を得た場合は他の留学生も受講することができる。毎年4月と10月に開講され、日常生活と研究に必要な日本語の基礎を学ぶ。

岩手大学留学生センターでは、平成14年後期から毎学期、研修コースを開講した。

2. 実施概要

2.1 平成14年後期

(1) 受講生

受講生は計8名で、内訳は大使館推薦国費研究留学生2名、教員研修留学生4名、大学推薦国費研究留学生2名である。

身分	配属先	性別	国籍	生年
大使館推薦国費研究留学生	岩手大学工学研究科	男	ﾏﾀﾞｶﾞｽｶﾙ	1975
大使館推薦国費研究留学生	岩手大学人文社会科学部	女	ﾐｬﾝﾏｰ	1974
教員研修留学生	岩手大学教育学部	男	中国	1973
教員研修留学生	岩手大学教育学部	男	ﾌｨﾘﾋﾟﾝ	1973
教員研修留学生	岩手大学教育学部	男	ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ	1973
教員研修留学生	秋田大学教育文化学部	女	ﾊﾟﾗｸﾞｱｲ	1971
大学推薦国費研究留学生	岩手大学連合農学研究科	男	ﾈﾊﾟｰﾙ	1968
大学推薦国費研究留学生	岩手大学農学研究科	男	中国	1976

(2) 授業日程

第1週（10月1日～）　　学生受け入れ

第２週（10 月 8 日～）	開講式、ひらがなクラス開始
第３週（10 月 15 日～）	基礎日本語クラスとカタカナクラス開始
第４週（10 月 21 日～）	漢字クラス開始
12 月 24 日～1 月 10 日	冬休み
1 月 9 日～1 月 11 日	スキー研修
第 15 週（1 月 31 日）	修了テスト
第 16 週（2 月 7 日）	修了発表会
3 月 14 日	修了式

(3) 週間時間割

	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)
Ⅰ(9:00～10:30)	基礎日本語	基礎日本語	基礎日本語	基礎日本語	総合日本語
Ⅱ(10:30～12:00)	基礎日本語	基礎日本語	基礎日本語	基礎日本語	総合日本語
Ⅲ(13:00～14:30)	かな・漢字	かな・漢字	かな・漢字	かな・漢字	総合日本語
Ⅳ(14:45～16:15)	個別指導	個別指導	コンピュータ		

(4) 授業担当者

基礎日本語：　松岡洋子、中村ちどり（留学生センター専任教員）

総合日本語：　尾中夏美（留学生センター専任教員）

かな：　岡崎正道、松岡洋子、尾中夏美、中村ちどり（留学生センター専任教員）

漢字：　大高久枝、松林和美（留学生センター謝金講師）

コンピュータ：　小笠原洋光（留学生センター専任教員）

個別指導：　尾中夏美、中村ちどり（留学生センター専任教員）

センター長講義：　岡田仁（留学生センター長）

2.2 平成 15 年前期

(1) 受講生

受講生は計 5 名で、内訳は大使館推薦国費研究留学生 5 名、そのうち 2 名が秋田大学と北里大学に配属の学生である。

身分	配属先	性別	国籍	生年
大使館推薦国費研究留学生	岩手大学農学研究科	男	フィリピン	1968
大使館推薦国費研究留学生	岩手大学工学部情報システム工学科	男	アルゼンティン	1979
大使館推薦国費研究留学生	岩手大学農学部	女	ザンビア	1968
大使館推薦国費研究留学生	秋田大学工学資源科学研究科	男	ミャンマー	1968
大使館推薦国費研究留学生	北里大学水産学研究科	男	ブラジル	1979

(2) 授業日程

4月11日～16日	ひらがな Week
4月17日	開講式
4月18日	総合／かたかなクラス開始
4月28日	漢字クラス開始
7月18日	修了テスト
7月22日～24日	スピーチ練習
7月25日	修了発表会
7月28日～8月25日	夏休み
8月26日～9月19日	補習授業
9月8日～9月10日	留学生見学旅行
9月22日	修了式

(3) 週間時間割

	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)
Ⅰ(9:00～10:30)	総合	総合	復習	総合	総合
Ⅱ(10:30～12:00)	総合	総合	復習	総合	総合
Ⅲ(13:00～14:30)	かな・漢字	かな・漢字	コンピュータ	かな・漢字	かな・漢字
Ⅳ(14:45～16:15)			個別指導		

※ 漢字クラスは13:45～14:00の間は自習時間

(4) 授業担当者

総合日本語：　大高久枝、松林和美、坂本淳子（留学生センター非常勤講師）

復習：　中村ちどり（留学生センター専任教員）

ひらがな：　岡崎正道、松岡洋子、尾中夏美、中村ちどり（留学生センター専任教員）

漢字：　大高久枝、松林和美（留学生センター非常勤講師）

コンピュータ：　小笠原洋光（留学生センター専任教員）

日本事情：　尾中夏美（留学生センター専任教員）

個別指導：　中村ちどり（留学生センター専任教員）

センター長講義：　岡田仁（留学生センター長）

2.3 平成15年後期

(1) 受講生

受講生は計6名で4名が教員研修留学生（2名が秋田大学配属）、2名が大学推薦国費研究留学生である。このうち2名の大学推薦国費研究留学生は、定員に余裕があったため学内公募を行って受講を認めた者であるが、授業開始後に専門研究との両立が難しくなり受講を取りやめた。

身分	配属先	性別	国籍	生年
教員研修留学生	岩手大学教育学部	女	インドネシア	1969
教員研修留学生	岩手大学教育学部	女	メキシコ	1974
教員研修留学生	秋田大学教育文化学部	女	ベトナム	1976
教員研修留学生	秋田大学教育文化学部	女	ペルー	1972
大学推薦国費研究留学生	岩手大学工学部	男	バングラデシュ	1975
大学推薦国費研究留学生	岩手大学農学部	男	バングラデシュ	1975

(2) 授業日程

10月14日　　開講式、オリエンテーション

10月15日	授業開始
12月24日～1月12日	冬休み
1月8日～10日	スキー研修
2月19日	授業修了
2月20日	修了発表会
3月10日～17日	補習授業（Aクラス）
3月15日	修了式

(3) 週間時間割

受講生の日本語レベルが３つに分かれたため、3クラスの開講となった。BクラスとCクラスの授業は、留学生センターの他の日本語授業（日本語特別コース・日韓共同理工系学部留学生プログラム）の授業との共同開催である。

①Aクラス（入門～初級終了まで）

	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)
Ⅰ(9:00～10:30)	総合	総合	読解・作文	総合	総合
Ⅱ(10:30～12:00)	総合	総合		総合	総合
Ⅲ(13:00～14:30)	かな・漢字	かな・漢字	コンピュータ	かな・漢字	かな・漢字
Ⅳ(14:45～16:15)		日本事情	個別指導		

※ 漢字クラスは13:45～14:00の間は自習時間

②Bクラス（初級後半～中級前半まで）

	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)
Ⅰ(9:00～10:30)	初級Ⅱ総合	初級Ⅱ総合		初級Ⅱ総合	初級Ⅱ総合
Ⅱ(10:30～12:00)	初級Ⅱ総合	初級Ⅱ総合	読解・作文	初級Ⅱ総合	初級Ⅱ総合
Ⅲ(13:00～14:30)	かな・漢字	かな・漢字	コンピュータ	かな・漢字	かな・漢字
Ⅳ(14:45～16:15)		日本事情		個別指導	

※　　で示されたクラスは、日本語特別コースとの共同開催

③Cクラス（初級終了～中級前半終了まで）

	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)
Ⅰ(8:40～10:10)		中級Ⅰ作文			

Ⅱ(10:30～12:00)	中級Ⅰ漢字	中級Ⅰ読解	中級Ⅰ会話	中級Ⅰ漢字	中級Ⅰ読解
Ⅲ(13:00～14:30)	初級Ⅱ漢字 個別指導		コンピュータ	中級Ⅰ総合	初級Ⅱ漢字
Ⅳ(14:45～16:15)	中級Ⅰ総合	日本事情	中級Ⅰ作文	中級Ⅰ総合	
Ⅴ(16:30～18:00)	中級Ⅰ総合				

※ 漢字クラスは45分授業。　は日本語特別コースの授業、□は日韓理工系留学生プログラムの授業

(4) 授業担当者（研修コース開講分のみ）

総合日本語：　大高久枝、松林和美、坂本淳子（留学生センター非常勤講師）

読解・作文：　中村ちどり（留学生センター専任教員）

かな・漢字：　大高久枝、松林和美（留学生センター非常勤講師）

コンピュータ：　小笠原洋光（留学生センター専任教員）

日本事情：　尾中夏美（留学生センター専任教員）

個別指導：　中村ちどり（留学生センター専任教員）

（文責：中村ちどり）

全学共通教育科目（日本語）

センター設立以前は、フランス語・ドイツ語など他の言語と同様の「初修」外国語と位置づけられ、日本語能力試験１級レベル（でなければ、そもそも入試で合格できない）の外国人留学生（各学部の１年生）に対し、建前としては初級（イロハ）の日本語を必修受講させるという、まことに不合理にして奇妙きてれつな慣習が長年続いてきていたが、センターの発足に伴いこの不可思議な慣習を撤廃し、入学時点で既に相当レベルの日本語能力を有している１年次の留学生の実情に適合した「上級日本語」を選択で履修させる、合理的な規則に改変した。

「上級日本語」の授業は週３回設けられ、会話（口頭表現技能）・作文（論文作成）・読解の指導が３人の教員によって行なわれている。受講者は単位取得希望の留学生のほか、高度な日本語力を磨きたいと望む学生やその家族も参加し、「日本語特別コース」の上級編も兼ねる授業となっている。

「読解」の具体的な内容としては、次のようなものを多く取り上げている。

(1) 日本の歴史と文化　(2) 現代日本の政治と経済　(3) 日本の諸習慣と日本人の意識 (4) 日本および最近の出来事

（文責：岡崎正道）

全学共通教育科目（日本事情）

この科目は、留学生を対象とした全学共通教育科目（人間と文化；選択科目）に位置付けられている教科で、日本文化に関する知識の修得と日本の現代文化への理解を深めることを目的とし、平成15年度より開始された。なお、この科目は、理系(担当；小笠原)と文系（担当；岡崎）との２コースに分かれて開講されている。

１．理系

日本の大学制度の変遷と科学技術導入の歴史、その社会的背景について参考文献を基に調べ、現在日本が進めている大学の法人化と産官学協力、即ち産業振興と大学教育との関わりに目を向け、科学教育がもたらす社会・文化への影響を考える。

1.1 概要

江戸時代末期から明治にかけて導入された日本の近代製鉄、重機械産業と大学・高等専門学校などの学校制度の設立と変遷を科学史等の資料に基づいて社会史の流れの中で捉えて学び、その上で最近の工業技術に関する話題、産官学連携に関する新聞記事、及び自然科学者の著作物等を資料としてその読解を中心に、講義、討論を行う。

このような授業の中から受講生自ら問題を設定し、考えそれに答えるレポートを書くことで、内容理解を深め、作文能力の向上を図った。

授業は次の３項目の順序で進めた。

１）産業の近代化と大学制度

２）現代産業のベースとなった1950年代からの日本の産業のトピックス

３）現在の産業界の話題と大学の役割

1.2 受講生

平成15年度前期：中国からの留学生３名で、文系、理系混在である。

平成15年度後期：中国から３名、ロシアから２名で文系、理系混在である。

2.3 授業

平成 15 年度前期：この期間の学生は中国人で、日本語の読みと内容の理解力は漢字の訓読や日本語特有の言い回しをべつにすれば、ほぼ満足できる状況にあり、用意した資料の輪読は、困難なく進めることが出来た。この輪読では、学生が一通り読んだ後、各段落毎に簡単にその内容をまとめて説明する、という仕方で行った。こうすることで、学生自

身何を読み取るべきかを考え、その内容を自分のものとして行くことが出来たという満足感が得られたようである。

授業で取り上げた内容について、その項目を以下に記す。

1) 日本における近代科学の成立
2) 日本の近代技術（製鉄）
3) 自動車産業（トヨタのエンジン・・・シボレー）
4) 電子顕微鏡の開発
5) 鉄道と新幹線、中国新幹線
6) 電卓開発
7) 新聞に見る日本の産業・・・水素をエネルギー
8) 日本の産業構造と市場システム（産業組織論、岩手の産業）
9) 日本から見た中国事情；中国関連産業
10) リサイクル・ビジネス；産業廃棄物処理と科学技術

平成15年度後期：この期間の学生は中国、ロシアの2カ国からの留学生で、中国からの学生は日本語の読みと内容の理解力は漢字の訓読や日本語特有の言い回しをべつにすれば、ほぼ満足できるが、ロシアからの学生は用意した資料の輪読を、中国の学生と同じレベルで進めることには困難があった。それ故、ここでの輪読資料にはルビを振った原稿を用意することが必要であった。こうすることによって、多少変則的（言い回しや内容の難しい所は中国の学生に回して）であったが、順調に資料の輪読を進めることが出来た。

後期の授業で取り上げた内容について、その項目を以下に記す。

1) 日本における近代科学の成立
2) 日本の近代技術（製鉄）
3) 韮山反射炉の話と熱伝達
4) 工作機械と鉄鋼業
5) 技術者養成機関としての大学（東京大学）
6) 日本の鉄道、新幹線
7) 日本のノーベル賞受賞・・・島津製作所と田中耕一氏、カミオカンデと小柴昌俊氏
8) 中国新幹線
9) 京セラとNEC
10) 産学官連携；東京大学・・・経営、工学、環境、　東大120周年記念行事の意味

1.4 評価

平成15年度前期：日常的な評価は、輪読及び内容の議論のなかで判断することが出来たが、全体の理解と文章表現力を見るために、レポートを課した。

テーマは、

（ｉ）講義全体を通じての感想文（自国[中国]の歴史的状況を対比しての）（2名）

（ii）新幹線の歴史（1名）

となっており、このクラスの成績は、ほぼ満足のいくものであった。

平成15年度後期：受講生が、学部生と日本語・日本文化研修生ということもあり、出席状況が思わしくなく、授業の流れが途絶えがちで充分な内容把握がなされず、結果として、授業全体として何を考えているかという問題意識が薄れてしまった。前期と同様日常的な評価は、輪読及び内容の議論のなかで判断することが出来たが、全体の理解と文章表現力を見るために、ここでもレポートを課した。

テーマは、

（ｉ） 日本の大学教育が何を目的として行われてきたのか（2名）

（ii） 日本の自動車技術産業について（1名）

（iii） 無題（1名）

このクラスの成績は、予想通り、この科目の目標には程遠いものであった。

前後期を通じて、受講生の人数は３～５名である。主に中国の学生（文系、理系混在）で、その他、ロシアから２名程度である。日本語の能力として上級を予定しての講義であり、現在の岩手大学の留学生でこれを修得する能力を有する学生は中国からの学生に限定される。したがって、中国以外の国からの学生に対しては、中級クラスの日本語教育が主な内容となる変則的授業が求められ、指導方法・教材選択が難しい。

1.5 参考資料

この科目の全体構想を伝えるために授業で用いた参考資料のリストを以下に記載する。

単行本：廣重　徹　　著　『科学の社会史』(岩波書店)

国立天文台　編　『理科年表』2002年(丸善)

山口幸夫　　著　『20世紀の理科年表』(岩波書店)

伊藤正昭　　著　『地域産業論』　(学文社)

前田清志　　編　『技術史教育論』(玉川大学出版会)

新庄浩二　　編　『産業組織論』(有斐閣)

馬渕　幸一　著　『日本の近代技術はこうして生まれた』(玉川大学出版会)

梅棹忠夫　　著　『近代世界における日本文明』(中央公論社)

新聞記事：日刊工業新聞、　日本工業新聞、　朝日新聞、　読売新聞、　岩手日報

権上かおる「東京大学創立120周年記念－東京大学展－」（金属 vol. 68(1998)90)

2．文系

外国人留学生が日本で学び、また日常生活を営む上で必要となる日本に関する諸事情、諸文化事象について講義する。具体的内容を以下に記す。

1）日本人の言語表現の特質

2）日本人の精神と日本文化の特性

3）日本の歴史と思想

4）政治・経済・社会・風俗等、現代日本の諸問題

5）その他日本及び日本人に関するあらゆる事柄

受講生について：文系の受講はこの期間対象者がなかった。

（担当：小笠原洋光、岡崎正道）

日本語・日本文化研修コース

１．コースの特色

本コースのねらいとするところは、日本語及び日本の諸事情、即ち日本の文化・歴史・地理・政治・経済・社会・教育等々について、理解を深めさせることにある。教室内の学習にとどまらず、様々な体験学習等がふんだんに用意され、楽しみながら学べるのが本学の特色である。

２．受講生

２００２～０３年はロシア人１名、２００３～０４年はロシア・チェコ・中国各１名の計３名を受け入れた。

３．指導体制

留学生の専門分野や興味・関心にマッチする専攻の教員が、指導教官を務める。また日本語指導や生活・就学上の相談等については、国際交流センターの教員が共同で携わった。

４．活動内容

周辺の名所・旧跡等を訪ねたり、必要に応じ博物館等の文化施設で研修を行なう。学内・学外のイベント等に積極的に参加して、関係者や市民との交流を深める。花見・バスツアー・キャンプ・盆踊り・七夕・クリスマス・餅つき・スキーツアー・ひな祭り等々、季節ごとの催しが大学及び学外諸団体によって数多く実施され、留学生はこれらを通して日本文化を実体験することができる。

５．受講資格･修了要件

このコースを受講することができる学生は、中級レベル以上の日本語力を有し、日本語・日本文化に関する分野を専攻もしくは学習している者である。

コースの修了者には修了証を交付、また受講科目については、成績等の条件を満たした場合単位を与える。

（文責：岡崎正道）

日韓共同理工系学部留学プログラム予備教育 （平成 15 年度実施）

1．プログラムの目的

日本、韓国両政府の協定により実施されるプログラムの一環として実施される学部入学前予備教育である。半年間の韓国における日本語および専門科目の予備教育を経て本学予備教育課程に入学し、工学部進学に必要な日本語および専門基礎科目力の習得を目的とする。

2．学習者

韓国政府により選抜され、本学に入学を希望する（配置される）学生。

3．実施実績

平成 15 年度は当該プログラム 4 期生が 10 月に 1 名来日した。本学では初めての受入である。

留学生センター日本語教育部門での日本語予備教育と同時に、工学部の協力を得て専門基礎科目教育を実施した。

① 時間割

時限	月	火	水	木	金
1・2		日本語個別指導			
3・4	工業英語	数学	会　話	漢　字	日本語個別指導
5・6	漢　字	工学 TA 指導	コンピュータ	総　合	漢　字
7・8	総　合	日本事情	読　解		工学 TA 指導
9・10				理系日本語	

■は工学部提供専門基礎科目

＜教材＞総合：『現代日本語コース中級Ⅰ』(名古屋大学出版会)
会話：『なめらか日本語会話』(アルク)
読解：『大学・大学院留学生の日本語②読解編』(アルク)
漢字：『Basic Kanji book vol.2』(凡人社)
日本事情：ビデオ、体験学習など
理系日本語：自然科学系基礎日本語
コンピュータ：Word,Excel,Power Point 使用法
日本語個別指導：作文、読解力補強
工学ＴＡ指導：「留学生の数学Ⅰ」（東海大学出版会）「留学生の物理学」（〃）
「留学生の化学」（〃）「理工系の日本語コミュニケーション」（丸善）

②主な日程

10月 6日	来日　（仙台空港出迎え）
10月 7日	在留手続き（外国人登録、銀行口座開設等）＊チューター付き添い
10月 8日	日本語コース　プレースメントテスト（特別コースと合同）
10月 14日	開講式（大学院入学前予備教育日本語研修コースと合同）
2月 19日	授業終了
2月 20日	修了発表会（大学院入学前予備教育日本語研修コースと合同）
3月 5日	修了式　（大学院入学前予備教育日本語研修コースと合同）

4．課題

- 学部入学のためには来日時の日本語能力がやや不足している。日本での半年間は中級後半から上級レベルの研修が必要である。
- 工学部との連携が不可欠である。今回は受け入れ前に工学部機械科と留学生センターとの協議が行なわれ、研修期間中の教育について協力体制が作られたが、今後も双方の連携により教育体制を整備することが重要である。
- 対象学生が1名だったため、教育体制が十分に整備されたとは言いがたい。今後、他のプログラムとの連携を考慮した上で、中級後半から上級レベルの入学前予備教育の充実を図りたい。

（文責：松岡洋子）

農学部インターンシッププログラム（パデュー大学）

日本語集中講座　（平成 15 年度実施）

1．目　的

岩手大学農学部がアメリカパデュー大学と学部間交流で実施しているインターンシッププログラムにより平成 15 年 5 月に 5 名のパデュー大学学生が来岩した。本講座は学生が企業、研究室にインターンシップに入る前に簡単な生活会話を習得させるため 5 日間実施した。

2．学習者

パデュー大学よりインターンシッププログラムで来日した学生 5 名。うち、3 名は日本語未習、2 名は初級前半レベル修了者。

3．実施実績

①スケジュール

Schedule	
Date &Time	Topic
Monday 26thMay　(9:00-9:50)	Level check
(10:00-12:00)	Introductions, Everyday Greeting & Useful Expressions　Numbers
(13:00-15:00)	Campus tour
Tuesday 27th May　(9:00-1200)	Shopping　Eating out
(13:30-16:00)	English café
Wednesday 28th May (9:00-12:00)	Daily life
(13:00-15:00)	Task: Make your schedule in Iwate
Thursday 29th May (9:00-12:00)	Asking location
(13:00-15:00)	Task: Ask & Find (have a stroll in Morioka)
Friday 30th May　(9:00-12:00)	Emergency　Feeling ill

②実施形態

- 専任教員 1 名、謝金講師 1 名、TA1 名で指導に当たった。
- クラスは初習者と既習者の 2 つに分けた。（既習者は TA が担当）
- 教材は特に定めず、生活会話を取り上げ、指導した。
- 午後はボランティアアシスタントを活用し、さまざまな課題を与え活動した。

4．課題

- 実施が急遽決まったために、準備、体制作りが不十分だった。そのため、学生が来日後、実際に面接を行い、カリキュラムを立て直す必要が出て十分に対応できなかった。
- 農学部担当教員との打ち合わせが頻繁に取れ、全体的な運営は順調に進められた。
- 送り出し大学側の要望が明確でなく、どの程度指導すればいいのか混乱した。事後反省の際、送り出し側はあまり日本語講座を希望していないことが明らかになった。しかし、インターンシップを行なう際、日本語がまったくできないと作業に支障をきたし、また、プログラムの構成も困難となる。パデュー大学と岩手大学とで検討が求められる。
- 予算については、留学生センターの経費で行なわれた。これは、年度当初予定されていないものだったので、対応に苦慮した。できるだけ事前に計画を立てるべきである。
- 学生自身の講座に対する反応は概ね好評であったが、5日間でのより有用なカリキュラム構築を模索したい。

（文責：松岡洋子）

English Café ー英語による交流

1．立ち上げの背景

日本の大学では英語会話の授業があっても学生の英語はなかなか上達しない。理由はさまざまあるが、ひとつには学んだ英語を実際に使う機会があまりないことがあげられる。英語が単に学ぶべき対象から本当にコミュニケーションを図る手段となったときに動機づけがなされるし、総合的な英語力ものびる。

これまで長年盛岡市内で短期研修を実施してきた米国インディアナ州にあるアーラム大学のSICEプログラムに対して本学が教室を提供することが可能となったことを機会に、米国人大学生と岩手大学生との交流の一環としてEnglish Caféを開催することとした。

2．実施状況

本事業では、日本語研修をしているSICEプログラムの参加者に英語のみで岩手大学の日本人や英語圏以外の留学生とさまざまな話題について話し合ってもらうことを主眼とした。参加者は5，6人程度のグループに分かれて座り、1テーブルに1，2人の米国人学生が着席した。自己紹介から始まり、互いの大学生活や授業料のこと、専攻についてなどさまざまな話題がとびかっていた。留学生で英語が得意な学生も参加し、2002年は約20名、2003年には約30名が参加した。English Caféの名のとおり、この交流会では温かい飲み物とスナックが用意され、リラックスした雰囲気でのおしゃべりが特徴である。

3．関連事業

英語による交流事業の一環として、SICEプログラム引率教員による英語での専門分野の特別講義を実施している。英会話ではなく、英語で新しい知識を学ぶ体験を提供し、英語能力を実際に使用できる機会としている。講義の理解を助けるために配布資料に日本語の訳をつけることにより流れについていきやすいよう配慮をしている。

（担当：尾中夏美）

海外の大学との交流・学生派遣

1．留学生センター設立以前の海外の大学との大学間・部局間協定と学生派遣

岩手大学には多くの海外高等教育機関との協定があるが、そのほとんどが共同研究を目的とした学術交流協定である。留学生センター設立当時の学生派遣が可能な学生交流協定が締結されていたのは、大学間協定でロシア１件、中国１件で、部局間協定では中国２件、米国１件である。

2．海外派遣・留学プログラム

留学生センター設立当時に各学部で実施されていた研修・留学プログラムは表のとおりである。人文社会科学部のすべての短期研修と教育学部の短期研修の中の１つは全学対象であるが、それ以外は当該学部の学生であることが必須条件となっている。プログラムの運営は世話人を務める教員の献身に依存するところが大きく、大学や学部のシステムに組み込まれているものが少ないのが特徴であった。横の連絡がなく、大学としてどのような交流が実施されているのか全体像を知る資料も当時は存在しなかった。

主催学部	短期研修数（数週間から１ヶ月程度）	留学プログラム数（数ヶ月から１年程度）
人文社会科学部	１（米国）２（カナダ）１（オーストラリア）	１（ロシア）１（イギリス）
教育学部	３（中国）	２（中国）
工学部	１（オーストラリア）	
農学部	１（米国）	１（中国）

（注）網掛けは全部またはその一部が全学対象のプログラムを示す。

3．当面の課題と留学生センターの対応

大学名	国	締結年月日
セント・メアリーズ大学	カナダ	2003年7月31日
アーラム大学	米国	2003年8月11日

英語の習得のために英語圏への研修を希望する学生は潜在的に多い。しかし、現実としてこれに対応する体制は十分ではなく、また海外研修プログラムを周知するオリエンテーションなども組織化されていなかった。強い希望を持つ学生は休学して留学や研修に出かけるのが現状であった。学生交流協定校への交換留学の利点は原籍大学に授業料を納めていれば留学する相手大学の授業料免除が受けられ、奨学金の可能性や単位互換の対応などさまざまな特典があり、しかも事前に綿密な計画をたてておけば卒業年次を遅らせること

なく 4 年で卒業することが可能であるが、残念なことにこの制度を生かせる基盤がなかった。そこで、留学生センターとしては英語圏への大学間学生交流協定に基づく海外派遣プログラムの設置が急務との認識から表にある 2 大学と、学生交流を実施することを前提としての大学間学術交流協定を締結した。また、2003 年 5 月に第 1 回海外研修・留学オリエンテーションを実施し、約 30 名の学生が参加した。

4．学生交流の実情と今後の課題

留学生センターが設置されている 2001 年から 2003 年までの期間の交流協定に基づく学生交流の実績は以下の表のとおりである。外国語教育では英語の履修者が圧倒的に多いにもかかわらず定期的に派遣できる協定校がないので、今後の開拓が必要である。同時に、英語圏の大学への留学には高い英語能力が求められるので、留学を希望する学生の英語力育成への支援も今後取り組まなければならない課題である。

		受け入れ数	派　遣　数
2001 年度	中国（協定校）	2	2
	ロシア（協定校）		
2002 年度	中国（協定校）	1	2
	ロシア（協定校）	2	1
	私費（協定校）		1（中国）
2003 年度	中国（協定校）	3	2
	ロシア（協定校）	2	

（担当：尾中夏美）

チューター・会話パートナー制度

1．設立の理由

留学生に対する支援を活発に行うとともに、岩手大学に在籍する日本人学生に留学生と接する機会を提供するという二つの目的を達成するために留学生のチューター制度と会話パートナー制度を平成 15 年度より開始した。これまで国の留学生支援の一環として国費留学生に対しては有償のチューターが配置されてきたが、それとは別に無償で留学生の到着時の世話と最初の友人となるのがこのチューターである。会話パートナーは留学生の日本語会話の相手になるボランティアである。留学生と友達になりたいがきっかけがつかめない学生には好都合な制度となっている。

2．オリエンテーション

第1回チューター・会話パートナーオリエンテーションを 2003 年 5 月に開催した。チラシやポスターで呼びかけをしたが、当日は約 50 名が参加し関心の高さがうかがえた。両方のボランティアに求められることの説明、経験者の体験談披露などを行った後に登録をしてもらった。チューターには 12 名、会話パートナーには 54 名の登録があった。希望するなら両方に登録することも可能となっている。

3．活用方法

国費留学生の場合指導教官が適当なチューターを探せない時に留学生センターとしてこのシステムを活用してチューターを配置し、私費留学生の場合には希望が出た時点で対応した。会話パートナーに関しては、日本人学生との会話練習を希望する留学生への個別対応と同時に、日本語授業でのアシスタントとして会話の練習にも加わってもらった。

4．課題

両方とも登録後は必要な事態が生じた時点で適宜連絡をとったが、一人ずつ電話で問い合わせをするのに手間がかかったことと、手書き登録のため、メールアドレスがまちがっていて必要なときに連絡が取りづらいことがあった。また、連絡する学生に偏りがでた。登録者からは、せっかく登録したのに声のかかる頻度が少なく残念だったとの意見が寄せられこれらの点の改善が今後の課題となった。

（担当：尾中夏美）

国際交流会館活動記録

1．会議等

1.1 国際交流会館オリエンテーション

日時：平成14年　5月24日　　午後12：30～

開催内容：会館利用についての説明、諸注意を行う。

1.2 国際交流会館運営委員会　第1回（平成14年度）

日時：平成14年　8月26日　　午後3時～

場所：学生センター会議室

議題：

（1）平成１４年度入居者の選考

（2）その他・・・下記の事項

渡日直後の留学生の寝具の調達について

新規学寮の使用可能性についての要望

1.3 国際交流会館運営委員会　第2回（平成14年度）

日時：平成15年　3月 6日　　午前10時～

場所：学生センター会議室

議題：

（1）平成15年度入居者の選考

（2）その他・・・　入居者増加に対する対応の検討

1.4 国際交流会館運営委員会　第1回（平成15年度）

日時：平成15年　9月　2日　　13時30分　～

場所：学生センター会議室

議題：

（1）平成15年10月入居者の選考

（2）会館関係規則の改正について

(1) 岩手大学国際交流会館細則の一部改正について

(2) 岩手大学国際交流会館運営委員会規則の一部改正について

(3) 岩手大学国際交流会館及び岩手大学学生国際宿舎への外国人留学生選考基準について

(4) その他・・・会館駐車場の管理

会館居住日本人チューターの扱いについて

1.5 国際交流会館オリエンテーション

日時：平成15年10月21日　　17時　～　18時

開催内容：入居者の自己紹介などの後、会館利用についての説明、諸注意を行う。
その後、親睦を計る為の懇親会を行い閉会

1.6 国際交流会館運営委員会　第2回（平成15年度）

日時：平成16年　3月　3日　　午後13時30分～

場所：学生センター会議室

議題：

（1）平成16年4月　入居者の選考

（2）教員研修留学生の入居期間延長に係わる要望について

（3）その他

2．施設利用関係

留学生の情報交換や、日本語の習得のために施設使用許可書を備え、広く施設活用の便宜を計った。

1．	平成15年　4月13日	Meeting	参加人員	10名
2．	平成15年　5月24日	スピーチコンテスト		25名
3．	平成15年　5月24日	日本シルクロードクラブ歓迎会		25名
4．	平成15年　7月11日	ガーデンパーティ		100名
5．	平成15年　9月30日	中国留学生会		50名
6．	平成15年 11月14日(毎月第二金曜日)	市民ボランティア相談会		

（担当：小笠原洋光）

外国人留学生実地見学旅行概要

○ **平成１２年度**

１．見学場所：池田ワイン工場、釧路湿原、阿寒湖、摩周湖、よつば乳業工場（北海道）
　　日　　程：平成１２年８月２２日（火）～８月２６日（土）
　　参加人数：３６名

２．見学場所：東京国立博物館、下町風俗資料館、ＮＨＫ放送センター、国立西洋美術館
　　日　　程：平成１３年３月２８日（水）～３月２９日（木）
　　参加人数：１５名（人文社会科学研究科・教育学研究科）

３．スキー研修：安比高原スキー場
　　日　　程：平成１３年３月１３日（火）～３月１５日（木）
　　参加人数：３１名

○ **平成１３年度**

１．見学場所：鹿島神宮・水郷（千葉県）、
　　国立科学博物館資料センター・つくばエキスポセンター（茨城県）、
　　日光江戸村・日光東照宮（栃木県）
　　日　　程：平成１３年８月２８日（火）～８月３０日（木）
　　参加人数：３２名

２．見学場所：国際研究交流村、（株）荏原製作所藤沢事業所、
　　いすず自動車（株）藤沢工場、鎌倉
　　日　　程：平成１４年３月４日（月）～３月６日（水）
　　参加人数：１５名（工学研究科）

３．スキー研修：安比高原スキー場
　　日　　程：平成１４年３月１８日（月）～３月２０日（水）
　　参加人数：４３名

○ **平成１４年度**

１．見学場所：昭和新山、洞爺湖、小樽、小樽商科大学、層雲峡（北海道）
　　日　　程：平成１４年８月２６日（月）～８月３０日（金）
　　参加人数：３０名

２．見学場所：（株）日清製粉鶴見工場（神奈川県）、国際研究交流大学村（東京都）
　　日　　程：平成１５年３月２７日（木）～３月２８日（金）
　　参加人数：８名（農学研究科）

３．スキー研修：安比高原スキー場

日　　程：平成１５年1月９日（木）～1月１１日（土）

参加人数：４６名

○ **平成１５年度**

１．見学場所：松島、会津若松鶴ヶ城、福島大学

日　　程：平成１５年9月８日（月）～9月１０日（水）

参加人数：２７名

２．見学場所：富士重工（株）（埼玉県）、日立粉末冶金（株）（千葉県）

日　　程：平成１６年2月１６日（月）～2月１７日（火）

参加人数：８名（工学研究科）

３．見学場所：国会議事堂、皇居、東京国立近代美術館、鎌倉

日　　程：平成１６年3月１１日（木）～3月１２日（金）

参加人数：１３名（人文社会科学研究科、教育学研究科）

４．スキー研修：安比高原スキー場

日　　程：平成１６年1月７日（水）～1月９日（金）

参加人数：４０名

留学生が参加した地域交流一覧

平成14年度

年　月　日	事　業　名	主　催	参加留学生・日本人数
4月～3月	「外国語事情」「国際奉仕基礎」講師	杜陵高等学校	年間4名
4月20日	高松の池花見	地球市民の会	留学生50名総勢90名
6月4日	見前南小学校派遣	世界と遊ぼう－じゃらんじゃらん	留学生1名
6月27日	東松園小学校派遣	世界と遊ぼう－じゃらんじゃらん	留学生1名
6月29日	不用品バザー	日中友好協会	総数100名
7月8日	北松園小学校派遣	世界と遊ぼう－じゃらんじゃらん	留学生2名
7月20日	岩手大学ガーデンパーティー	岩手大学留学生会	総数150名
8月2日	さんさ踊り	盛岡市	留学生30名
8月28日	見前小学校派遣	世界と遊ぼう－じゃらんじゃらん	留学生2名
9月18日	東松園小学校派遣	世界と遊ぼう－じゃらんじゃらん	留学生1名
10月9日	東松園小学校派遣（学校公開）	世界と遊ぼう－じゃらんじゃらん	留学生1名
10月	らくだ市	花巻らくだ堂	留学生10名
11月11日	遠野市立土淵小学校派遣	世界と遊ぼう－じゃらんじゃらん	留学生1名
11月29日	日本語スピーチコンテスト	盛岡ゾンタクラブ	留学生5名
12月5日	ひろばモリーオ仙北教室派遣	世界と遊ぼう－じゃらんじゃらん	留学生1名
12月10日	じょいフェスティバル	日本語交流室じょい	総勢１５０名
12月23日	クリスマスパーティー	岩手大学留学生会	総勢80名
12月25日	迎新年交流会	日中友好協会	総勢100名
2003年1月4日	新春餅つき会	地球市民の会	留学生30名総勢60名
1月15日	新年交歓会	地球市民の会	総勢40名
1月19日	滝沢村国際交流フェスティバル	世界と遊ぼう－じゃらんじゃらん	留学生7名
2月4日	月ヶ丘小学校派遣	世界と遊ぼう－じゃらんじゃらん	留学生1名
2月25日	留学生と中学生の交流会	北松園中学校	留学生40名
2月26日	城北小学校派遣	世界と遊ぼう－じゃらんじゃらん	留学生4名
3月6日	桜城小学校派遣	世界と遊ぼう－じゃらんじゃらん	留学生1名

平成15年度

年　月　日	事　業　名	主　催	参加留学生・日本人数
4月～3月	「外国語事情」「国際奉仕基礎」講師	杜陵高等学校	年間３名
4月26日	ハイキングと花見	地球市民の会	留学生50名総勢100名
5月24日	シルクロード音楽祭	岩手大学留学生会・日本シルクロード倶楽部・地球市民の会	総勢100名
6月21日	留学生と小学生の交流会	黒沢尻東小学校	留学生10名

6月24日	見前南小学校派遣	世界と遊ぼうーじゃらんじゃらん	留学生3名
7月1日	遠野市立土淵小学校派遣	世界と遊ぼうーじゃらんじゃらん	留学生１名
7月1日	国際交流活動	東松園小学校	留学生２名
7月8日	国際交流活動	東松園小学校	留学生２名
7月14日	英語交流	東松園小学校	留学生５名
7月27日	小学生との料理交流	世界と遊ぼうーじゃらんじゃらん	留学生3名
8月1日	さんさ踊り	盛岡市	留学生30名
8月29日～31日	世界の結いづくり事業	岩手県	留学生20名
9月5日	国際交流活動	東松園小学校	留学生１名
9月10日	国際交流活動	東松園小学校	留学生１名
9月11日	英語交流	東松園小学校	留学生１名
9月12日	国際交流活動	東松園小学校	留学生１名
9月17日	英語交流	東松園小学校	留学生２名
9月25日	矢巾町立徳田小学校派遣	世界と遊ぼうーじゃらんじゃらん	留学生3名
10月8日	国際交流活動	東松園小学校	留学生２名
10月10日	国際交流活動	東松園小学校	留学生１名
10月15日	国際交流活動	東松園小学校	留学生３名
10月16日	国際交流活動	東松園小学校	留学生１名
10月24日	日本語スピーチコンテスト	盛岡ゾンタクラブ	留学生5名
10月28日	国際交流活動	東松園小学校	留学生１名
11月1日	新留学生歓迎会	ＡＶＩＳ	留学生２５名
11月11日	高校生カルチャーキャンプ	岩手県高等学校文化連盟	留学生7名
11月16日	滝沢村国際交流フェスティバル	滝沢村・滝沢村教育委員会・実行委員会「ムンド」（協力：世界と遊ぼうーじゃらんじゃらん）	留学生5名
11月19日	国際交流活動	東松園小学校	留学生１名
11月29日	ユース・フォーラム２００３	国際ソロプチミスト盛岡	留学生15名高校生30名
12月3日	城南小学校派遣	世界と遊ぼうーじゃらんじゃらん	留学生2名
12月9日	じょいフェスティバル	日本語交流室じょい	総勢150名
12月31日	年越しパーティー	ＡＶＩＳ	留学生５名
2004年1月3日	新春餅つき会	地球市民の会	留学生20名総勢60名
1月11日	新年餅つき大会	ＡＶＩＳ	留学生１３名
1月17日	河北児童センター派遣	世界と遊ぼうーじゃらんじゃらん	留学生3名
1月17日	新春交歓会	岩手大学中国人留学生学友会	総勢100名
1月21日	春節	日中友好協会	総勢150名
2月25日	留学生と中学生の交流会	北松園中学校	留学生55名
2月29日	ＡＶＩＳとひな祭り	ＡＶＩＳ	留学生10名
3月14日	ベトナムランチ	ＡＶＩＳ	留学生６名
3月19日	新年交歓会	地球市民の会	総勢40名

（担当：岡崎正道・尾中夏美）

執筆者一覧（掲載順）

猪内正雄（ししうち　まさお）	農学部教授（国際交流センター長・理事・副学長）
岡田仁（おかだ　ひとし）	人文社会科学部教授（前留学生センター長）
松岡洋子（まつおか　ようこ）	国際交流センター助教授
中村ちどり（なかむら　ちどり）	国際交流センター助教授
小笠原洋光（おがさわら　ひろみつ）	国際交流センター助教授
岡崎正道（おかざき　まさみち）	国際交流センター教授
尾中夏美（おなか　なつみ）	国際交流センター助教授

留学生教育と国際交流－岩手大学留学生センターの歩み－

2004年10月発行

編集・発行　岩手大学国際交流センター (Iwate University International Center)

〒020-8550　岩手県盛岡市上田3丁目18番34号

Tel　019-621-6290　／　Fax　019-621-6297

IUIC

Iwate University International Center